

東日本大震災

踏み出そう!

子どもたちの笑顔のために

# あすへ向けての軌跡

～震災から4年を経て～



国立大学法人  
宮城教育大学

教育復興支援センター

東日本大震災

踏み出そう!

子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡

震災から4年を経て



# 明日に向かって

## 教育復興支援センターの新しい展開



国立大学法人宮城教育大学長

見上 一幸

東日本大震災という未曾有の災害を経験して、早くも4年余りが過ぎようとしております。

あらためて震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、ご遺族や被災された方々の一刻も早い生活基盤の復興、心の傷の快復を願っております。

この1月、2月、本学と連携協力関係にあるいくつかの市町村教育委員会を訪れ、被災地の復興状況を視察するとともに、現在直面する教育課題等を教育長ご自身から伺う機会をもうけました。

同じ被災地といっても復興に向けた進捗状況の隔たりは大きく、また、同じ市民、町民でも地域や家庭ごとに人的・物的被害は一様ではなく、仕事・家屋の有無、経済状況、健康状態、通勤・通学等の交通問題など、格差はますます広がりがつつあるとのご意見が多かったように思います。

教育の場においても、被災地では時間の経過とともにむしろ新たな問題が顕在化しているとお聞きました。具体的には、被災した子どもたちの学力低下、運動不足、心的ストレスがもたらす弊害など、課題が山積し、子どもたちを支える教員の疲労感の軽減も含めて、課題解決に至る道は険しく、長時間を要するであろうとの見解がほとんどでした。

なかでも、復興の目安である住民人口の流失、特に未来の象徴ともいえる児童・生徒数の激減は、街の復興に深い

影を落としているようです。

南三陸町を例に挙げると、震災以前から過疎化、少子・高齢化が進み、林蔭小学校、入谷中学校がそれぞれ志津川小学校、志津川中学校に統合されていました。震災後は在籍数の減少が加速化しています。震災の前後で児童・生徒数は次のとおりです(学校基本調査)。

(小学生)平成23年度 833名→26年度 560名

(67.2%)

(中学生)平成23年度 448名→26年度 366名

(81.7%)

震災後、県内外への転居、児童生徒の転校も多く、現在の在籍者は震災前の約7~8割です。また、小、中学生で減少率が大きく異なるのは、兄弟姉妹でも中学生は南三陸町内の中学校へ通学を続けていますが、小学生は(仮設)住宅のある町外の小学校へ通っていることが要因だと思われます。

本学では、教育復興支援センターを通じて震災直後から志津川中を中心として、南三陸町内の小・中学校に、他大学の学生も含め、ボランティア学生を派遣してきました。南三陸町は、派遣延べ回数、人数とも栗原市、気仙沼市と並んで最も多い地域の一つです。教育長からは、遠く県外からも参加する学生ボランティアへの感謝や、地元出身の本学学

生が後輩を支援してくれることへの感激のことはちょうだいしました。

平成27年3月14日～18日、「震災の経験と教訓を仙台・東北から世界へ」をテーマとして、仙台市で世界の防災戦略を議論する第3回国連防災世界会議が開催されました。世界各国の首脳、閣僚級が参加し、平成17年に神戸で採択された「兵庫行動枠組(HFA)」の検証及びそれを引き継ぐ国際社会における防災、減災活動の基本指針が検討された会議であります。

この会議において、本学としてもそのいくつかに参加することになりました。

その一つは、文部科学省、日本ユネスコ国内委員会と共同で主催する『東日本大震災・総合フォーラム』です。「持続可能な開発のための教育(ESD)を通じた防災・減災の展開——より良い子どもたちの未来に向けて」とのテーマで、実践事例の発表、パネルディスカッションが行われました。冒頭、私自身がフォーラム開催の趣旨説明を行いました。東日本大震災からの復旧復興状況、教育の復興に向けた本学の取組等を紹介するとともに、今後どのようにしてESDのコンセプトを防災・減災教育に生かしたらよいかを各分野の第一線で活躍するパネリストの方々に呼びかけました。

第二に、復興大学が主催する『シンポジウム』において、学生代表が震災以降現在に至るまでの本学、センター、学生ボランティアの多様な活動と成果を発表いたしました。

第三に、『エクスカッション』では、ボランティア協力員の有志が、海外からの参加者で被災地視察を希望する方々を仙台市荒浜・名取市閑上方面へ案内するツアーを実施しました。見学先である閑上中の旧校舎、洞口家住宅、日和山等、何度も訪れ下調べを行い、英文によるパンフレットづくりや、英語によるスピーチの訓練に励んでいたのが印象的です。

その他、市内各会場には本センター、ボランティア協力員の活動を展示するブースが設けられ、その説明にあたる学生、仙台駅や各会場で通訳として案内・誘導にあたる学生など、本学学生の活躍の場は多く、貴重な経験になったことと思います。

さて、今年は宮城教育大学が昭和40年、教員養成の単科大学として開学して50年の節目の年を迎えます。

本学としても、平成16年度、国立大学法人宮城教育大学として新たなスタートをきって以降、さまざまな改革に取り組んできました。「教員養成教育に責任を負う」大学として教員養成教育と現職教育とを両輪とした地域に密着した教育の実施、広い視野や高度な専門性、実践的指導力を具えた教員の養成、東北地区の教員養成分野における広域拠点の

大学をめざすなど、本学の機能の強靱化のために教職員が一丸となって大学改革を推し進めているところです。その上で、現在は本学の伝統である「教師を志す学生にとって卒業はなく、『教師は生涯学び続ける存在』である」という考えを大切に、全ての教員の母港として、「教師に、地域に頼られる教育の広域拠点」であり続けられるよう努力していく所存です。

おわりになりますが、冒頭で言及したように被災地の復興に向けた取り組みや教育には課題が山積しています。そのため、被災地の教育委員会、学校からの学生ボランティアの支援要請はまだまだ絶えず、心のケアに関する問題などは支援内容の専門性、深刻さが高まっています。それに対応するためには、実際に児童生徒の支援にあたる学生の自覚と意識を高めるとともに、事前指導や現地指導、情報交換の充実を図ることなどにより、教師を志す学生の資質の向上に努めたいと考えます。

宮城教育大生にとって、大震災も、国連防災世界会議の地元開催も、創立50周年という節目の年も、ここ、青葉山キャンパスで迎えることは偶然の産物でありましょう。しかし、この偶然を必然と考え、「いま・ここに」あるからこそ、本学の使命や本学学生としての責務について再考することは意義深いことと思います。そして、できるだけ早い機会にボランティアを経験することを推奨します。

私自身もこれらの三つの出来事との出会いを必然と受け止め、次の50年、それを見通すことは難しくともせめて10年先を見据え、宮城教育大学や教育復興支援センターの新しい展開、具体的な方向性を見出したいと考えています。





# 目次

踏み出そう！子どもたちの笑顔のために  
あすへ向けての軌跡 震災から4年を経て

東日本大震災

明日に向かって  
教育復興支援センターの新しい展開 国立大学法人宮城教育大学長 見上 一幸

<b>I 教育復興支援センターの取組</b> .....	01
<b>1</b> 平成26年度の活動 .....	01
<b>2</b> 学生の自主的活動 .....	01
<b>3</b> 第3回国連防災世界会議 .....	02
<b>II 支援実践部門</b> .....	05
<b>1</b> 教育復興支援塾事業 .....	06
<b>2</b> 教員補助事業 .....	10
<b>3</b> 教員研修等事業 .....	14
<b>4</b> 子ども対象・参加イベント事業 .....	16
<b>5</b> 心のケア支援事業 .....	17
<b>6</b> こころざし・キャリア教育事業 .....	17
<b>III 研究開発部門</b> .....	19
<b>1</b> 研究部門の充実 .....	19
<b>2</b> 新たな教育の創造 .....	24
<b>IV 人材育成</b> .....	32
<b>1</b> ボランティア協力員 .....	32
<b>2</b> 学生企画 .....	36
<b>3</b> 国連防災世界会議に向けて .....	38

V 刊行物	41
1 教育復興実践事例集「明日の子どもたちのために」(第3集)	41
2 「被災から前進するために—未来へのメッセージ」(第3集)	41
3 「未来をめざして～亘理町・山元町教育復興の歩み～」	42
4 故郷復興プロジェクト視聴DVD「ともに、前へ—過去から未来を創ろう、中学生の力で」	42
5 教育復興支援センター「紀要」(第3集)	43
VI 外部資金等の獲得	44
1 文部科学省大学改革推進等補助金	44
2 文部科学省「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」	45
3 復興庁「新しい東北」先導モデル事業	45
4 公益財団法人 上廣倫理財団	46
VII 資料	47
1 平成26年度 教育復興支援センター活動(事業)実績一覧	47
2 教育復興支援センターだより	50

発刊にあたって 教育復興支援センター長 中井 滋



踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から4年を経て

# I

# 教育復興支援センターの取組

## 1 平成26年度の活動

被災から4年目に入った26年度，センター支援実践部門においては，学習支援を中心とする被災地からのボランティア学生の派遣要請にほぼ応えることができた。そして，ボランティア協力員を中心とする学生組織が本格的に機能し，各ボランティア団体の活動内容の充実が図られるとともに，学生主催の被災地視察研修，大学祭，各種研修会が企画・運営された。



## 2 学生の自主的活動

平成24年4月の入学生から，本センターと全学生とを仲介する役割を担うボランティア協力員をコース，専攻ごとに1，2名選出している。全学年そろると約150名の大所帯となる。本年度は他大学からの支援が学校数，延べ人数とも少なくなったが，協力員による積極的な広報の結果，本学学生の参加が増え，例年とほぼ同数の学生をボランティアとして派遣することができた。



## 3 第3回国連防災世界会議

3月14日～18日、「震災の経験と教訓を仙台・東北から世界へ」をテーマに190を超える国々から国賓級の代表者が集まり、世界の防災戦略を議論する会議が開催された。関連するパブリックフォーラムも350以上開催され、参加者も延べ15万人を超える盛大な催しとなった。

宮城教育大学としては、期間中8個の関連行事に参画したが、中でも本体会議に次いで重要な位置づけと言われた「総合フォーラム」を主催したことは、特筆に値する。「持続可能な開発のための教育を通じた防災・減災の展開～より良い子どもたちの未来に向けて～」というテーマで、文部科学省、国内ユネスコ委員会とともに主催したが、会場の萩ホールが満席になるほどの盛況を博した。被災地からの事例発表、海外からのパネリストを招いてのパネルディスカッションと充実した内容となり、各方面から高い評価をいただいた。さらに、発表でも会場からの質問でも、子どもたちが活躍したことが、強く印象に残るフォーラムだった。

また、17日の復興大学主催の「シンポジウム」では、学生代表が震災以降現在までの本学の取組、主として学習支援ボランティアの活動を報告するとともに、成果と課題を発表した。

さらに、18日には「エクスカージョン」として、本学ボランティア協力員の案内で、仙台市荒浜・名取市閑上方面へ被災地視察バスツアーを実施した。外国人対象ということもあり、英文での冊子づくり、スピーチ訓練等の準備に励んでいた。

他にも、本センター、ボランティア協力員の多様な活動を展示するブースがあり、活動内容を説明したり、仙台駅や各会場で案内・誘導にあたる本学学生の活躍の場は多かった。



# Let's move forward! 踏みだそう!

子どもたちの笑顔のために  
for a smile on the faces of children



※東日本大震災で甚大な被害を被った教育の復興に向け、重点的に取り組む事項等を明確にし、児童生徒の確かな学力の定着・向上及び現職教員の支援を中長期的視点に立って実施します。  
※自然災害のリスクを共有するアジア太平洋諸国との災害科学、災害復興、防災に関する知見を共有します。

\*For recovery of education that suffered massive damage during the Great East Japan Earthquake, we have identified the priority matters to be addressed, and we extend support to teachers for securing stable academic development of children.

\*We are also engaged in sharing knowledge and insight concerning disaster science, restoration, and disaster risk reduction with various Asia Pacific regions that are prone to the risk of natural disasters.

## 宮城教育大学教育復興支援センターの取組み

Initiatives taken by Center for Disaster Education & Recovery Assistance, Miyagi University of Education

### 学力の定着・向上

Academic assurance and development

被災地域児童生徒の学力の定着を目指す。

We aim to stabilize the academic development of children and students residing in disaster-hit areas.

### 教育復興人材の育成

Development of leaders for recovery of education

下記活動を通じて、将来教育分野での復興を担う人材の育成に寄与する。

Through the following activities, we contribute to the development of leaders who would play important roles in the recovery of education in the future.

- 児童生徒の学習支援・教員の補助
- 地域との協働事業補助
- 被災地視察研修・講習会・ボランティア活動実態調査
- 他大学との交流
- Learning assistance to children and students, support to teachers
- Support for collaborative programs in the community
- Disaster site visits and training, lecture sessions, survey of actual volunteer activities
- Exchange with other universities

### 関係機関との連携・協働

Cooperation and collaboration with the relevant institutions

宮城県内の教育委員会、宮城県内の国公立大学、全国の国立教員養成系大学・学部などと協働する。

We cooperate with Boards of Education in Miyagi Prefecture, public and private universities in Miyagi Prefecture, and national universities and departments engaged in teacher-training nationwide.

### 防災・復興の情報発信

Disseminating lessons about disaster prevention and restoration

災害科学、災害復興、防災に関する知見を国内外に広く発信する。

We disseminate lessons and knowledge concerning disaster science, disaster restoration, and disaster risk reduction domestically and globally.





踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から4年を経て

# III

# 支援実践部門

東日本大震災で甚大な被害をこうむった教育の復興に向け、重点的に取り組む事項等を明確にし、児童生徒の確かな学力の定着・向上及び現職教員の支援を中長期的視点に立って実施している。

III 支援実践部門

## — 支援プログラム — Assistance Programs

### 1 教育復興支援塾事業

Programs to assist recovery of education in classes



女川町内地区集会所での学習支援



仙台市荒浜地区の子どもたちへの夜間の学習支援



仙台市立中野小学校での放課後学習支援



夏休みくりはら塾での学習支援



丸森町での夏休み自由研究の手伝い

### 2 教員補助事業

Projects for assisting teachers



東松島市教委主催の図書整理 (10万冊の寄贈があった)



仙台市立中野小学校での遠足への付き添い



石巻支援学校での運動会補助 一緒に準備体操



岩沼市立玉浦小学校での授業教員補助



仙台市立荒浜小学校運動会でのボランティア

### 3 教員研修事業

Teacher training projects



関東圏同窓生ネットワーク総会 防災教育に関する研修



栗原市立志波姫小学校 防災教育校内研修



美里町教委主催 支援員等研修

### 4 子ども対象・参加イベント事業

Assisting event organizing for children



被災地の交流会 「女川町を元気にする会」



中部フィルハーモニー交響楽団によるコンサート 仙台市立荒浜小学校、七郷中学校

### 5 心のケア支援事業

Psychological care and assistance projects



南東北3大学連携「災害復興学」市民講座

### 6 こころざし・キャリア教育事業

Career education assistance projects



東松島市におけるキャリア教育研修会



## — 学生の自主的活動 — Activities initiated by students



ボランティア協力員総会 代表挨拶



協力員運営委員会の定例会/ オープンキャンパス高校生への説明



学習支援ボランティア 不安解消会



学生企画の被災地視察 南相馬市/気仙沼市



大学祭

意見交換会「子どもに震災を伝える」/ ボランティア活動の展示発表



## 1 教育復興支援塾事業

日程	実施場所・学校名等	実施内容	派遣実人数 (他大学内数)	派遣延人数 (他大学内数)	協力・連携大学
7/22～7/30	塩釜市立第三小学校	自学自習支援(小3～小6年生対象)	7	10	
7/31～8/6	大崎市立古川東中学校	自学自習支援(小5・6年生及び中1～3年生対象)	2	(2)	4 (4) 愛知教育大学
8/4～8/8	気仙沼市内小・中学校	自学自習支援(小3～6年生及び中1～3年生対象)	12	(2)	32 (10) 早稲田大学
8/4～8/8	色麻町立色麻学園①	自学自習支援(小3～6年及び中1～3年生対象)	2	2	
8/4～8/8	大和町立宮床中学校	自学自習支援(数学・英語, 中1～3年生対象)	4	12	
8/4～8/8	大河原町内中学校	自学自習支援(中1～3年生対象:大河原中・金ヶ瀬中①)	7	14	
8/4～8/8	登米市立南方中学校	自学自習支援(主に中3対象)	15	(15)	75 (75) 京都教育大学 大阪教育大学
8/5～8/11	角田市立角田小・中学校	自学自習支援(角田小学校, 角田中学校)	7	8	
8/6～8/12	大崎市立古川中学校	自学自習支援(小5・6年及び中1～3年生対象)	5	(2)	10 (3) 愛知教育大学
8/6～8/8	名取市立関上中学校①	自学自習支援(5教科・中1～3年生対象)	4	9	
8/7～8/11	本小牛田コミュニティセンター	自学自習支援(中1～3年生:小牛田中学学生)	3	5	
8/7～8/8	丸森町立丸森中学校	自学自習支援(5教科・中1～3年生対象)	5	10	
8/9～8/11	明成高校(茂庭荘)	学習支援(小論文・英語・数学)	2	6	
8/16～8/20	栗原市教育研究センター	中学生を対象とした「学府くりはら塾」での講師(3教科, 教材作成・指導を含む)	21	63	
8/18, 21	富谷町立富谷第二中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	6	9	
8/18～19	大河町立金ヶ瀬中学校②	自学自習支援(中1～3年生対象)	2	3	
8/18～8/19	名取市立関上中学校②	自学自習支援(中1～3年生対象)	6	12	
8/18～8/20	色麻町立色麻学園②	自学自習支援(小3～6年及び中1～3年生対象)	1	3	
8/18～8/20	仙台市立蒲町中学校	自学自習支援(5教科)	8	(2)	24 (6) 東北学院大学
8/18～8/20	富谷町立日吉台中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	5	8	
8/18～8/20, 8/22	富谷町立富谷中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	5	12	
8/18～8/21	大崎市立古川南中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	2	7	
8/18～8/21	女川地区小・中学校および仮設住宅	自学自習支援	18	(6)	47 (24) 福岡教育大学
8/18～8/22	塩釜市内4中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	9	(7)	45 (35) 東京学芸大学
8/18～8/22	柴田町立槻木小学校	自学自習支援	1	5	
8/18～8/22	南三陸町立戸倉小学校	自学自習支援・環境整備(全学年)	8	(4)	38 (20) 奈良教育大学
8/18～8/22	大郷町立大郷小・中学校	サマースクール講師・自学自習支援	14	35	
8/18～8/22	登米市内小・中学校(迫地区)	自学自習支援(小3～6年生及び中1～3年生対象)	5	11	
8/19～8/20	大衡村立大衡中学校	自学自習支援(5教科)	2	4	
8/19～8/21	岩沼市中央公民館(仮設住宅入居小・中学生)	自学自習支援(仮設に入居している児童, 生徒対象)	5	13	
8/19～8/21	岩沼市立玉浦小学校	自学自習支援	6	14	
8/20～22	栗原市文化会館・教育研究センター	自学自習支援(小学生版「くりはら塾」での講師)	12	31	
12/23～12/26	蔵王町ございんホール	自学自習支援(主に中学生対象)	1	3	
12/24～12/26	大和町立宮床中学校	自学自習支援(中1～3年生対象, 主に数・英)	3	6	
12/24～12/26	栗原市文化会館・教育研究センター	小学3～6年生を対象とした「学府くりはら塾」での講師(算数, 冬休みの課題・指導を含む)	10	16	
12/25	柴田町立船岡中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	2	2	
12/25～12/26	気仙沼市内小・中学校	自学自習支援(小3～6年及び中1～3年生対象)	10	(3)	20 (6) 早稲田大学
12/25～12/26	大郷町立大郷小学校	自学自習支援(小4～6年生対象, 算・国)	8	11	
12/25～12/26	大崎市立古川東中学校・古川南中学校	自学自習支援(小・中学生対象)	4	7	
12/25～12/27	栗原市教育研究センター	中学生を対象とした「学府くりはら塾」での講師(3教科, 教材作成・指導を含む)	8	19	

## ① 学府くりはら塾(中学校)(学習支援, 教育相談等)

夏 8月16日～20日 栗原市教育研修センター 1～3年生対象 参加学生21名  
 冬 12月22日～25日 栗原市教育研修センター 3年生対象 参加学生8名

12月は、3年間で学習した国語、数学、英語の3教科について、宮教生が作成した練習問題（高校入試の過去問）をテスト形式で行い、間違いの多い箇所や解けない設問の解説・指導を行い、受験に向けた課題や弱点の克服を図るもの。受験上の悩み、勉強法の相談や作文指導も行われた。



## ② 気仙沼市学び教室

〈夏休み学び教室〉8月4日～8日 参加学生 12名

気仙沼中・鹿折中・松岩中・階上中・面瀬中・大島中・小原木中・唐桑中・津谷中

〈冬休み学び教室〉12月24日～26日 参加学生 10名

気仙沼中・鹿折中・松岩中・階上中・面瀬中・大島中・大谷中学校

午前中は小学生、午後は中学生を対象にした学習支援活動となった。長期休業の課題や問題集に取り組む子どもたちへの個別指導が中心である。休み時間には、心のケアの一環として子どもたちとの触れ合いに積極的に取り組んだ。

【成果】会場となった中学校のほとんどの校庭に仮設住宅が建てられている。それだけ津波被害が大きい地域であるため、前述したように学習支援だけでなく休み時間での心のケアに取り組んだ。僅かの時間であるが、子どもたちも被災のことを忘れ楽しいひとときを過ごすことができたと思われる。



宿泊先で行われる情報交換



冬休み学びの教室

### ③ 女川町立小・中学校(学習支援)参加学生 18名

夏季休業学習会 8月18日～21日

女川小学校・女川中学校

各集会所(浦宿・旭が丘・上地区・女川一小仮設住宅・清水, 新田地区仮設住宅・多目的運動場仮設住宅・野球場仮設住宅・運動公園仮設住宅)

小学校, 中学校と一部重なる日程で学習会が実施された。小学生対象の学習会は, 会場が学校ばかりでなく, 各地域の集会所で自学自習の支援にあたった。特に, 女川町は人口の約9%に当たる住民が犠牲となっており, 全校生の半数を超える子どもたちが仮設住宅から通っている状況である。そのため, 学習支援ばかりでなく, 心のケアの一環として話し相手や遊び等の子どもたちとの触れ合いの機会を設けることに努めた。

**【成果】**中学生の多くは, 学習よりも学生に話し相手になってもらうことに喜びを感じていたようである。学生と学校生活等について和やかに会話する光景が見られた。小学校においては, 各地区の集会所での学習会が大変充実し, 子どもたちは自分で準備した学習課題に真剣に取り組んでいた。また, その後のゲーム大会では, 時間を忘れてゲームに興じる姿が見られた。



中学生への個別指導



各地域の集会所で



勉強が終わった後のゲーム大会(仮設住宅集会所)

#### ④ 登米市立南方中学校(学習支援)8月18日～22日 参加学生15名

今年度は、京都教育大学、大阪教育大学の学生、大学院生の派遣となった。

南方中学校へは24年の夏休み以来、夏・冬休みの学習支援に繰り返し学生を派遣している。初の機会に京都教育大生を派遣したが、その折南方中学生、京都教育大生とも意気投合し、中学生から卒業式に参加するよう依頼があり、それに応えて4名の京都教育大学生が南方中の卒業式に参列している(本学学生2名も出席)。その後、前回参加した学生が再訪するため、同校へは毎回京都教育大生を最優先で派遣してきた。なお、今夏は日程、派遣人数の都合から大阪教育大生も参加したが、宮城教育大生を派遣できず他大学との交流ができなかった点が残念であった。



広々とした講堂での学習



公民館の和室も活用

#### □ 平成26年度 教育復興支援ボランティア協力大学

	大学名	支援先	実人数	延人数
1	東京学芸大学	塩釜市内中学校	7	35
2	群馬大学	名足小学校	1	4
3	愛知教育大学	古川東中学校	2	4
		古川中学校	2	3
		志津川中学校(夏期)	8	24
		志津川中学校(春期)	4	20
4	大阪教育大学	南方中学校	8	40
5	京都教育大学	南方中学校	7	35
6	奈良教育大学	戸倉小学校	4	20
		丸森小学校	5	25
		志津川中学校(春期)	7	35
7	福岡教育大学	女川地区小中学校	6	24
8	東北学院大学	仙台市立蒲町中学校	2	6
9	早稲田大学	気仙沼市内小中学校(夏期)	2	10
		気仙沼市内小中学校(冬期)	3	6
計			68	291

## 2 教員補助事業

日程	実施場所・学校名等	実施内容	派遣実人数 (他大学内数)	派遣延人数 (他大学内数)	協力・連携大学
継続	仙台市立中野小学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	10		
継続	仙台市立荒浜小学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	6		
継続	塩釜市立第一小学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	1		
継続	仙台市立蒲町中学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)			
継続	女川町立女川小学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	8	37	
5/24	宮城県立石巻支援学校	運動会の準備・運営補助, 児童生徒への活動補助	6	6	
5/31	仙台市立荒浜小学校	運動会の準備・運営補助, 児童生徒への活動補助	17	17	
6/21	岩沼市陸上競技場	岩沼市中総体(陸上競技)の実施・運営の補助	10	10	
8/18~8/20	南三陸町立志津川中学校	自学自習支援・部活動支援	11	(8)	33 (24) 愛知教育大学
8/29~8/30	奥松島市立鳴瀬未来中学校	運動会の準備・運営補助, 児童生徒への活動補助	19	38	
9/1~9/3	南三陸町立志津川小学校	教員補助	6	18	
9/16~9/19	南三陸町立名足小学校	教員補助	5	(1)	17 (4) 群馬大学
9/17~9/20	福島県会津若松市(大熊幼稚園, 大熊小・中学校)	教員補助	10	40	
9/22~9/26	丸森町立丸森小学校	教員補助	12	(5)	53 (25) 奈良教育大学
9/5, 12, 19, 26	女川町立女川小学校	教員補助	12	22	
11/1	宮城県立石巻支援学校	学校祭の準備・運営補助, 児童生徒への活動補助	14	14	
3/16~20	南三陸町立志津川中学校	教員補助	16	(11)	80 (55) 愛知教育大学 奈良教育大学

### 1 仙台市立荒浜小学校(教員補助, 遊び支援等) 通年

荒浜小学校は、現在、同じ宮城野区内の東宮城野小学校の校舎を借りて教育活動を行っている。

今年は、4~6名の学生が、授業中の学習支援や放課後の遊び相手として継続的に教員補助を務めている。また、5月に行われた運動会には、今年も17名の学生が準備や後片づけ、会の運営、また演技種目への参加などの支援にあたった。



## ② 仙台市立中野小学校(教員補助, 遊び支援等) 通年

中野小学校は、現在、同じ宮城野区の中野栄小学校の校舎を借りて教育活動を行っている。当校へは、発災の年の5月から継続的に学校支援にあたってきている。本年も、10名を越える学生がそれぞれに曜日を分担して、学習支援や放課後支援の教員補助を務めている。

主な活動内容は、以下のとおりである。

- ・ 学習支援：授業中の教員補助、子どもたちの学習サポート
- ・ 杉の子寺子屋：放課後を利用した「遊び塾」と「学び塾」の企画運営
- ・ 行事の補助：運動会、学習発表会などの運営の補助



## ③ 丸森町立丸森小, 大張小, 小斎小学校(教員補助)9月22日～26日

丸森町内の3つの小学校において、23日を除く4日間、9時過ぎから15時30分ごろまで、学校で計画する授業への支援を行う教員補助事業が行われた。奈良教育大と本学の学生12名が各小学校に分かれ、学習支援や放課後の児童の遊び相手などの教員補助を務めた。

宿舎のあぶくま荘から各小学校へは町教育委員会の車で送迎され、各学校でも先生方のきめ細かい受け入れ態勢のもと、図画工作や情報処理の授業などの支援にあたった。また、23日は教育長講話と沿岸被災地の視察研修が行われた。



丁寧に作業しているね



文字入力の手順は…

### ④ 南三陸町立名足小学校(教員補助)9月16日～19日

名足小学校は、大震災による津波が2階まで浸水したことにより校舎が使えず、伊里前小学校に間借りしていたが、25年11月に同じ場所で学校を再開した。教員補助事業として群馬大と本学の学生5名が、始業から給食指導、授業中の教員補助や放課後の児童の遊び相手、バスの見送りなどの支援にあたった。



### ⑤ 石巻支援学校(学校行事)

- ・ 体育祭 5月24日 教員補助(運動会の運営補助, 児童生徒の活動補助)
- ・ 学校祭 11月1日 学校祭の運営等(会場準備, 受付, 会場, 児童生徒の管理等)

石巻支援学校へは震災直後から、本学特別支援専攻の学生が中心となって、3人1チーム、2泊3日の日程で避難所の運営補助(清掃, 炊飯, 児童生徒との遊び等)にあたった。その縁で、現在も学校行事の支援を行っている。本学生以外でも、当校で教育実習や介護体験実習を経験した地元出身者の東北福祉大、石巻専修大、宮城学院女子大の学生が参加している。



## ⑥ 仙台市立七郷中学校(部活動支援)

本学の学生が小さい頃育った若林区の被災校に働きかけて部活動の指導補助を行っている。七郷中学校において平成24年の夏期休業中の学習支援を行った学生は、さらに部活動指導にも参画したいと申し入れ、10月下旬から土日を中心に野球部指導補助を現在も続けている。野球部顧問の先生の指導の下、プレーの模範を示したり、わかりやすく伝える工夫を行い、部員の信頼を得ている。



○(3年男子)最後に、現在の活動が復興支援になっているかと聞かれると、正直自信がない。だが、復興というのは町並みや景色といった目に見えるものばかりではないと思う。その地域に住む人々の心に寄り添っていくことが一番大事なのではないだろうか。だから、長い目で見ていく必要があると思うし、これからの復興を担うのは今の子どもたちであることは間違いない。子どもたちには今必死になって「頑張り方」を学んでもらい、いずれはこの地域で活動できる「カッコいい大人」になってもらいたい。それは学校生活のなかの部活動を通して培っていけるものだと思っている。それが子どもたちの創る未来に、復興につながっていくのだと考えている。今のような考え方まで引っ張っていった七郷中の子どもたち、先生方、保護者の方々、そして教育復興支援センターの方々には本当に感謝してもきれない。この恩返しは逸早く教師になり、多くの子どもたちの未来に関わっていくことで果たせよう。そして多くの経験を積み、いつの日か七郷に戻ってきて、今の子どもたちのその子どもたちを教える日がくれおなと夢見ている。支えてくださる方々に感謝の気持ちを持って、これからも子どもたちのため、復興のために、今現在持てるすべての力を注いでいきたい。

### 3 教員研修等事業

日程	実施場所・学校名等	実施内容	参加人数
6月6日	岩手県立生涯学習推進センター	学校と地域の融合～学校支援ボランティアが秘めている可能性～	80
7月18日	美里町駅東交流センター	子どもと向き合うための学び相談員・支援員としての心構え	20
8月21日	栗原市立志波姫小学校	防災教育校内研修	20
8月23日	TKP新宿ビジネスセンター	関東圏同窓生ネットワーク総会 研修会「防災教育シンポジウム」	35
10月15日	栗原市文化会館大ホール	学府くりはら学力向上講演会	360

#### ① 「学府くりはら」学力向上講演会 10月15日 栗原市文化会館大ホール

2学期制を採用している栗原市。いわゆる「秋休み」に講演会が開催され、本センターの特任教授が講師を務めた。

栗原市と本学は連携協力関係にあり、これまでも栗原市内の教員対象の講演会で本学の教員が講師を務めてきた。昨年度は台風によって中止となり、今回は2年ぶりの開催となった。

講演では、「キャリア教育から見えてきた確かな学力の向上」と題し、約360名の先生方を前に、栗原市でも取り組んでいる「志教育」が学力の向上につながるという話があった。仙台市の標準学力検査と生活・学習状況調査から見えた、小学生と中学生の学習意欲の違い、さらには、職場体験から戻ってきた中学2年生約6,600名に対するアンケート調査での驚きの結果など、いくつかのデータをその根拠として挙げた。「確かな学力」の中でも特に大切なのが学習意欲。その向上の鍵は「将来への夢」と結び付いていた。小中学生にとって身近な存在である高校生や大学生の姿はもちろん、地域で頑張っている大人たちの姿も大切なモデル。こうした交流が将来の夢につながり、学習意欲の向上に結び付く。栗原市ではすでに幾つかの中学校区で、校種間交流や地域との連携を盛り込んだ「志教育」を実践し大きな成果を挙げてきたが、その実践を後押しする講演となった。



## ② 栗原市立志波姫小学校 防災教育校内研修 8月21日

志波姫小学校と本センターとの共催で、防災教育に関する校内研修会が開催された。

「学校教育に根ざした防災教育の在り方」をテーマに、教育復興支援センターの職員が、いつ、どのようなかたちで起こるか見通せない災害に対処するためには、具体の避難訓練等だけでなく、情報入手力、情報分析力、行動力の育成を日々の授業を通して取り組む大切さについて触れた。それは取りも直さず、今学校で行っている、「基礎的知識・技能の習得」「思考力・判断力」「表現力」という学力の育成と一体であること等について講話を行った。



## ③ 関東圏同窓生ネットワーク総会 8月23日 TKP新宿ビジネスセンター

宮教大関東圏同窓生ネットワークは、関東圏で教員生活を開始した先生方の情報交換の場として本学キャリアサポートセンターが担当している。総会には、同窓生14名、本学在学学生10名、教職員11名の35名が参加した。

総会の中で、研修会「防災教育シンポジウム」が行われ、「防災教育と子どもたち」と題して、本センターの教員が講師を務めた。講演では、東日本大震災を振り返り、被災地の現状、学校における防災教育、学校と地域社会の連携などについてセンターの調査資料に基づき、防災教育の大切さを身近な例に置き換えて説明した。



## ④ 美里町学び支援事業研修会 7月18日

学び相談員・支援員に約20名を対象に、「子どもと向き合うための心構え」についての講話を行った。宮教大、学生のボランティア活動の実態を伝えるとともに、「環境・防災教育」の講義から「教師に求められる心のケア」として掲げたカウンセリング・マインドやファシリテーター（促進者）の姿勢、態度、役割等について解説した。



## 4 子ども対象・参加イベント事業

日程	実施場所・学校名等	実施内容	派遣 実人数	延人数 (参加人数)
6月3日	大和町立鶴巣小学校	総合学習における体験学習での指導支援	18	
6月7日	松島水族館	こども☆ひかりフェスティバルの補助	11	
6月25日	宮城教育大学	仙台市立中野小学校「ヤギふれあい体験活動の実施」	—	13
8月3日	仙台市立西山中学校	女川町民を対象とした交流イベント	10	41
11月7日	仙台市勾当台公園	仙台市PTA フェスティバルへの参加	3	
11月22日	東六郷小学校	東六郷小学校学校祭での演奏披露	6	
11月23日	亘理町公民館	サイエンスフェスティバルin亘理町2014への協力	3	
11月29日	石ノ森漫画館	本学技術教育講座主催のクリスマス工作イベントへの協力	5	
3月7日	名取市立開上中学校	卒業式での音楽演奏ボランティア	6	
3月21日	仙台市立東六郷小学校	卒業式での音楽指導ボランティア	2	
3月21日	仙台市立荒浜小学校	卒業式運営補助ボランティア	5	

### ① 女川を元気にする会・イベント事業26

8月3日(日)、女川町総合体育館で、交流会「女川を元気にする会」が行われた。仙台市内の西山中学校や桜丘中学校等6つの学校の生徒23名と8名の先生方、10名の本学生が参加した。はじめに女川町野々浜で、地域の方の指導のもとホヤとホタテの種付けの現場を見学し、その後女川町総合体育館で、仮設住宅民との交流会に臨み、ジャマイカのハンターさんや中学生と大学生による「赤とんぼ」「ふるさと」歌唱披露等が行われた。

交流会後、保護者、学生による焼きそばなどのフード提供がされ、参加者全員で会食をともにした。



中学生と本学生との合唱



屋台の様子（フードの提供）

## 5 心のケア支援事業

日程	実施場所	実施内容	参加人数
9月20日	AER2階アトリウム(仙台市)	佐藤静教授／公開集中講座「宮教大防災3days」災害後の生活と心のセーフティネット	50

### 1 宮教大防災3days

平成26年9月19日～21日の3日間にかけて、仙台駅直結の複合商業施設AER2階アトリウムにて公開集中講座「宮教大防災3days」が開催され、本学から臨床心理学を専門とする佐藤静教授が一般市民を対象に、「災害後の生活と心のセーフティネット」をテーマに公開講義を行った。同教授からは、震災が短期的・長期的に心身や思考にどのような影響を与えるのか、また、災害後のPTSDの具体的な症状等について説明があった。身近な支援のあり方として、挨拶や声がけ、雑談、仲間・居場所づくり(家族・地域の身近な人々による相互の支え合い、地域に根ざした「カフェ」活動等)の有用性が説かれた。最後には、支援には相手の気持ちに寄り添って話を聞くことが大事で、そのことが被災者の心の余裕、自己肯定感や自己効力感を回復する土台づくりになるとの話があり、来場者からは「支援している立場として参考になった」、「心のセーフティネットを意識して子どもたちと関わっていきいたい」との感想が寄せられた。



講演する佐藤静教授



会場内の様子

## 6 こころざし・キャリア教育事業

日程	実施場所	実施内容	参加人数
10月25日	エルパーク仙台(仙台市)	野澤副センター長／キャリア教育講演会「20歳からの自分磨き」	50
11月5日	ホテル白萩(仙台市)	野澤副センター長／みやぎ教育の日推進大会「みやぎからの発信～未来につなぐ教育の創造～」	200
11月26日	東松島市コミュニティセンター	野澤副センター長／東松島市協働教育研修会「今見直される協働教育の底力～東日本大震災が教えてくれたこと～」	150
12月16日	岩出山スコアハウス	野澤副センター長／大崎市協働教育研修会「協働教育におけるコーディネーターの役割」	100

### ① 「20歳からの自分磨き」キャリア教育講演会

10月25日、仙台市の中心部にあるエルパーク仙台を会場に、青年層を対象としたキャリア教育講演会を開催した。被災地の復興を担う若者たちに、自らの生き方を考える機会を提供し、一人一人のライフプランを明確にする意識を高めることを目指した。

当日は、学生に加え、仕事帰りの若者も参加し、50名ほどが集まった。宮城県教育委員会が取り組む「志教育」、仙台市教育委員会が取り組む「自分づくり教育」の理念を伝えたが、参加者からは自分の生き方を考えることの重要性に気づけて良かった等の感想が寄せられた。

### ② 「みやぎからの発信～未来につなぐ教育の創造～」みやぎ教育の日推進大会

恒例となっている「みやぎ教育の日推進大会」が11月5日、ホテル白萩において開催され、200名近い参加者が集まった。大震災からの復興を実現し、未来につなぐ教育を創造し、全国に発信することが重要との思いを共有した。大会では、古川中学校の志教育の実践の発表があり、それを受けて野澤副センター長が基調講演を行った。「みやぎ」には、東日本大震災以前から、協働教育、志教育、自分づくり教育など、これまで積み重ねてきた財産がある。復興を目指すとき、これらの教育が大きな役割を果たした。これからは、未来を拓く子どもたちを育てるために、みやぎらしい教育の創造を実現し、全国に発信しようという話に、会場の多くの人々が大きくうなずいていた。

### ③ 東松島市協働教育研修会 11月26日

「今見直される協働教育の底力～東日本大震災が教えてくれたこと～」

### ④ 大崎市協働教育研修会 12月16日

「協働教育におけるコーディネーターの役割」

宮城県では、協働教育事業を推進しており、県内各市町村では、研修会を実施している。東日本大震災の経験から、日頃から学校と地域が顔の見える関係を構築していたところでは、避難所運営やその後の復旧・復興もスムーズに展開したことが分かった。

そこで、大震災以前から取り組んでいた協働教育をさらに充実、発展させることが、地域を愛し、共に生きていこうとする子どもたちを育むことにつながると考えている。

東松島市、大崎市の会場において、多くの参加者が集まる中、野澤副センター長が講演、ワークショップ等を行った。参加者からは、これからの活動に役立つことを学ぶことができた、好評であった。





踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から4年を経て

# III

# 研究開発部門

## 1 研究部門の充実

教育復興支援センターには、刻々と変化する被災地の状況を把握し、復興支援ニーズを検討するとともに、それらを国内外の他機関へと発信し、共有していくため、研究開発部門が設置された。その機能を充実させるべく、2013年4月から、本学の兼務教員に加えて2名の特任教員を配置して調査研究を実施している。また、研究会や現地調査、共同研究などが定着し、震災からの復興状況や、諸外国の防災への取り組みなどを学び議論する「復興カフェ」を定期的に開催している。

### 1 震災復興・防災に関する調査・研究成果の学術発表 —東日本大震災からの教訓と知見の蓄積—

被災した自治体・教育委員会の協力を得つつ、被災した地域社会や学校を取り巻く現在の課題や復興の状況の把握に努めている。特に、転居や仮設暮らしを余儀なくされている被災者の空間的移動と地域との関係や、街づくりの課題などについてモニタリングを進めた。

また、教員養成系大学として教育委員会や学校現場との連携実績がある本学の特長を活かし、東日本大震災で実際に多くの学校が避難所として用いられたことについて、その経験と課題に関する情報収集を行い、記録していく。

専任教員の専門である、社会地震学や地理学の立場から、津波被災地に特有な自然環境（地震災害や津波災害に関わる地盤特性と地形地質などの環境）と社会環境（主に地域社会の仕組みや居住環境）の把握に努め、津波 災害からの避難行動に関する事例について情報収集を行っている。今年度実施した学術発表は以下の通り。

#### （執筆）

小田隆史（2014）：教員養成大学におけるサービスラーニングとしての防災・復興教育，日本安全教育学会第15回宮城大会予稿集，50-51.

小田隆史（2014）：ボランティア支援を通じた復興人材育成のためのセンター的機能：東日本大震災被災地の教員養成大学における復興支援拠点，『シナプス』2014年9月号，ジヤース教育新社。

#### （学会・研究会発表）

##### 国内

瀬尾和大（2014）：3.11津波の死者率についての若干の考察，日本地震学会講演予稿集 2014年度秋季大会（新潟市）C11-06，p73

瀬尾和大（2014）：津波災害と学校—東日本大震災時の津波避難行動から学んだこと—，東京工業大学地震工学研究レポート，No.130，pp.63-79

- 瀬尾和大 (2014) : 東日本大震災の津波災害について最近気になっている幾つかのこと, 神奈川大学第24回地盤環境研究会
- 瀬尾和大 (2014) : 3.11の津波避難は成功したのか? - 学校防災の教訓と未来に向けて -, 日本地震工学会「津波などの突発大災害からの避難の課題と対策に関する研究委員会」第5回震災対策技術展 (宮城) 併催セミナー
- 瀬尾和大 (2014) : 3.11大震災の津波避難行動を振り返る, 神奈川大学連続講演会「大震災の教訓に学び, 減災の重要性を考える」
- 瀬尾和大 (2014) : 地震観測や災害調査の経験から地震動について考えてきたこと, 建築構造技術者講習会 第16回地震応答解析・技術交流セミナー
- 小田隆史 (2014) : 教員養成大学におけるサービスラーニングとしての防災・復興教育, 日本安全教育学会第15回宮城大会, 仙台 (東北工業大学)
- 小田隆史・桜井愛子・村山良之 (2014) : バンダ・アチェにおける防災教育の展開, 東北地理学会春季学術大会, 仙台 (戦災復興記念館)

#### 海外

- Oda, Takashi (2014) : Disaster Risk Reduction and Education for Sustainable Development towards HFA2 and Post DESD, 国際交流基金・神戸大学震災復興セミナー, London, U.K.
- Oda, Takashi (2014) : Roles of Schools in Disaster Risk Reduction following the 2011 Tohoku Disasters in Japan: DRR Education in Preservice Teacher Training and In-service Professional Development, 17th UNESCO-APEID (Asia-Pacific Programme of Educational Innovation for Development) International Conference, Bangkok, Thailand (第17回ユネスコ一開発のためのアジア・太平洋教育イノベーションプログラム大会, タイ・バンコク)
- Oda, Takashi (2014) : Recovering Education and (Re) building Capacity in a Disaster-affected Teacher-Training University, 9th Annual International Workshop and EXPO on Sumatra Tsunami Disaster and Recovery, Banda Aceh, Indonesia (第9回スマトラ津波災害・復興国際ワークショップ, インドネシア・バンダアチェ)
- Oda, Takashi, Mizuno, Isao, and Hasegawa, Naoko (2014) : Displacement, relocation, and the spatial change in livelihood among survivors of the 3/11 Fukushima disaster, Association of American Geographers annual meeting, Tampa, Florida, USA (米国地理学会年次学会, 米フロリダ州タンパ)

## 2 他大学との共同研究

昨年度に引き続き, 国立大学法人東北大学と国立大学法人お茶の水女子大学などとともに, 震災復興支援及び東日本大震災の経験を踏まえた新たな防災教育に関する共同研究を実施して, それぞれの研究機関が有する特長を活かしながら, 知見の交換や情報発信を行っている。

### 研究代表者 共同研究の課題一覧

桜井愛子 東北大学災害科学国際研究所 災害復興実践学分野 准教授

研究課題「大災害被災地における持続発展可能なセーフ・スクールモデルの構築に向けて～インドネシア, バンダ・アチェ市の教育」

増田 聡 東北大学災害科学国際研究所 人間・社会対応研究部門 教授

研究課題「風評被害を克服する食料生産・供給体系の構築に関する調査研究」

水野 勲 お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科 教授

研究課題「東日本大震災復興支援及び防災教材作成にかかる共同研究」

### 3 グローバルな連携の構築・海外発信

災害からの教訓は、広く国内・国外に共有継承されてこそ活かされる。本センターでは、国内外の他の関係機関と連携して、上述の震災からの経験、教訓、知見を共有するとともに、同じく大きな災害を経験した他の被災地と協働して知恵を出し合いながら、復興を前進させるための一助とすることを目指している。

本学はこれまでも環境教育や持続発展教育 (ESD)、ユネスコスクールなどの取り組みを通じて国際社会とのネットワーク構築に積極的に取り組んできた。連携協定先であるタイ教育省国際教職員研究所との研修交流やJICA集団研修などの機会を通じて、防災教育、避難所運営等の分野での研究者・実務家交流を進めている。

さらに、2015年3月仙台市で開催された第3回国連防災世界会議の準備・企画調整における役割を果たした。

上述した各種学術発表を含めて、様々な機会を捉えて海外への情報発信を行っており、教育分野で強いつながりを有して来た本学の強みを活かした貢献の一つと考える。



タイ王国管理職教員等の研修 (4月：於・女川町立女川中学校)



JICA 教員集団研修生らによる仮設住宅での国際交流 BBQ (11月)



岩手県陸前高田市仮設住宅の皆さんと (11月)

本センターとしては、こうした他機関との有機的な連携関係を最大限に活用し、被災地のニーズ把握、教訓・経験の収集・蓄積、そしてそこから得られた知見の発信、教訓に努めて行く。

11月、国際交流基金・ロンドンセンターと神戸大学主催による国際シンポジウムにおいて、本センターの小金澤孝昭教授と小田隆史特任准教授が、災害復興における教育の役割について講演した。



講演会（於・国際交流基金ロンドンセンター）



#### 4 復興カフェ in Miyakyoの実施(一覧)

教育復興支援センターでは、日頃の復興支援活動や、新たな防災教育に役立てるため、災害復興や防災・減災に関連するテーマでの話題提供いただく場として、「復興カフェ」を実施している。

##### 今年度実施した復興カフェの概要一覧

第11回	6月11日(水)	<p>お話12:10~12:30 上映12:30~13:30</p> <p>☆ところ: 附属図書館1Fスパイラルラボ</p> <p>☆テーマ: 日系アメリカ人ジャーナリストからみた東日本大震災~被災者と海を越えた支援者の心のアーカイブ~</p> <p>☆ゲスト: ダイアン・フカミ監督</p>
第12回	10月19日(日)	<p>9:45~13:00</p> <p>☆ところ: 名取市大曲地区国重要指定文化財</p> <p>☆テーマ: 東日本大震災被災地からの復興</p> <p>協力: 仙台いぐね研究会(宮城教育大学小金澤研究室)</p>
第13回	11月13日(木)	<p>12:15~12:55</p> <p>☆ところ: 教育復興支援センター・2F会議室</p> <p>☆テーマ: 「大規模な広島土砂災害」</p> <p>☆報告者: 瀬尾和大</p> <p>教育復興支援センター・特任教授副センター長</p>

第14回	12月19日(金)	13:00～13:50 ☆ところ：附属図書館1F展示ホール ☆テーマ：「福島県いわき市の復興状況について」 ☆報告者：瀬尾和大・小田隆史 教育復興支援センター副センター長・特任准教授
第15回	1月22日(木)	12:15～12:55 ☆ところ：附属図書館1F展示ホール ☆テーマ：「岩手県陸前高田市の復興状況について」 ☆報告者：瀬尾和大&藤原忠和 教育復興支援センター副センター長&研究・連携課主任
第16回	2月4日(水)	12:15～12:55 ☆ところ：萩朋会館大集会室 ☆テーマ： 「継続したボランティア活動を通して」 ☆報告者：仙台市立荒浜小学校・仙台市立中野小学校ボランティア学生一同
第17回	3月9日(月)	13:20～14:00 ☆ところ：教育復興支援センター会議室 ☆テーマ：「カンタベリー地震後のニュージーランドにおける復興・防災教育」 ☆報告者：オークランド大学教育学部 キャロル・マッチ准教授

## 5 「紀要」の刊行

本センターでは、「教育復興支援センター研究紀要」を刊行し、本センターの活動に関する調査研究、教育実践に関する論文等を集約、発信している。(詳細は刊行物のページ参照)本論文は、教育復興支援センターのホームページから無料で閲覧出来るほか、今年度からは国立国会図書館にも献本している。

また、3月14日～18日まで開催された第3回国連防災世界会議のパブリック・フォーラム等のブース会場でも、閲覧・別刷の配布を行ったほか、本学附属図書館のデータベースから電子ジャーナルとしても無料で論文閲覧が可能である。

## 2 新たな教育の創造

東日本大震災の経験から、「命」や「生き方」の大切さを改めて認識させられた。また、災害から身を守り、復興を成し遂げるためには、自助・共助の心を育まなければならない。こうした目的を果たすために、新たな教育が注目されている。今年度取り組んだ実践について、その成果を紹介する。

### 1 「p4cせんだい」の推進

#### ① p4cについて

p4cとは、philosophy for children。直訳すると「子どもの哲学」。対話を用いて集団づくりや探究心育成を目指した教育プログラムである。アメリカで考案され、特にハワイでは大きな成果をあげている。ポイントは、①円座になり、毛糸のボールを使っての対話 ②「なぜ?」「本当なの?」など、「問い」の重視であり、「何を話しても笑われない、批判されない、否定されない」「みんなが、ちゃんと聞いてくれる」という安心感（セイフティ）が基盤にある。文化や価値観の異なる人びとのコミュニティづくりを目指していたハワイの学校では、p4cの「セイフティ」の理念が大きな役割を果たしてきた。仙台ではp4cに接した何人かの校長から、「問いを大切にすることから、思考力や探究心を養いたい」という声や、「対話を重視するp4cで、コミュニケーション能力を高めたい」といった声、さらには、「心の教育や集団づくりを目的として活用したい」といった声が聞かれた。このように、p4c活用の目的は、子どもの実態に応じて設定することができる。またそれは複合的な効果を生み出すことから、子どもの成長過程に応じて、活用の目的を随時見直し高めつつ、継続して取り組むことが、その効果を倍増させる鍵となる。

#### 「基本的セッション」の進め方

##### (1) 趣旨の説明とコミュニティボール作りの説明

「なぜ?」と考える大切さや、毛糸の巻き方について。

##### (2) コミュニティボールを作りながらの自己紹介

「名前」と「自分の好きなもの」など。

##### (3) コミュニティボールの完成とルールの説明

持っている人だけ話せる、パスが可、発言してない人優先、否定や批判をしない、など。

##### (4) 問いを考える

正解が分からないもの、調べてもわからないこと、みんなで考えてみたいこと、など。

##### (5) 問いの発表

コミュニティボールを回し先生が黒板に書く、書いたカードを黒板に貼るなどの方法も。

##### (6) 問いの選定

多数決も可。顔を伏せさせるなどの配慮を。補助者の活用もあり。

##### (7) 問いについての話し合い

問いを出した理由を話させたあと、問いへの回答や、問いに関連しての対話をする。



## (8) 考えを深めさせるための問い返し

教師も一人の参加者としてさらなる疑問を投げかける。「本当？」などのキーワードを活用する。

## (9) 振り返り

- ① 考えを話せたか？ ② 話を聞いたか？ ③ 考えが深まったか？
- ④ 安心して参加できたか？ ⑤ またやってみたいと思うか？

## ② 実践の足跡

### (1) 第1期（萌芽期：試行錯誤の実践を通して） 2013年7月～2014年5月

仙台で最初にp4cの実践が行われたのは、2013年7月である。会場は東日本大震災以来、様々な支援を受けつつハワイとの交流を進めてきた若林小学校。翌8月には、ハワイ大学で長年にわたってp4cの研究に携わり、当時兵庫県立大学に勤務していた豊田光世先生を招いて、仙台市立小中学校の校長ら10名がp4cについての研修を受けた。その後、翌年3月までの間に仙台市内7つの小中学校で、延べ10コマの授業が行われた。そのうち2校が仙台市教育課題研究発表会において実践を発表した。ここでは、ハワイ大学から、「p4cハワイ」の育ての親であるトーマス・ジャクソン博士にも参加していただいた。

2014年度になって、公益財団法人上廣倫理財団の寄附により本学の教育復興支援センター内に「上廣倫理・哲学教育研究室」が設置され、p4cの研究と普及を目指して専任の特任教授2名が配置された。この年度から東京工業大学の特任准教授となった豊田先生を招き、4月から6月までの間に、仙台市内6つの小中学校において、延べ11コマの授業実践が行われた。また、「p4cせんだい」と名付け、夜には実践者が集まったのカフェ（自由な雰囲気の中での意見交換）や、研修会も行われるようになった。

この時期は、ボール作りと、「問い」を出して話し合うセッションが中心であり、p4cの有効性や可能性、進め方に関わる疑問や課題などが明確になってきた。実践した教員や参観者から「子どもの変容を見ると、多くの可能性を秘めた実践だ」という声が多く聞かれた。その「多くの可能性」について、実践を通して明らかにしていくという展望が開けてきた時期でもあった。

### (2) 第2期（確立期：ハワイとの交流を通して） 2014年6月～2014年9月

この確立期には、公益財団法人上廣倫理財団の教員交流事業によって、ハワイの研究・実践者と、「p4cせんだい」の実践者との相互訪問が実現し、内容の濃い交流が行われた。10年にも及ぶ「p4cハワイ」のノウハウを学ぶ中で、「p4cせんだい」のスタイルが固まってきた時期である。

#### ア p4cハワイのメンバーによる仙台訪問

6月19日からの6日間、ハワイから、大学、高校、中高一貫校、小学校に勤務する6名の研究者・実践者が仙台を訪れ、5つの小学校と1つの私立高校、そして、本学の学生を対象とした実践を行った。また土曜日には、全国の実践者も交えた実践発表会や情報交換会なども行われ、p4cに対する理解を深めるとともに、今後への展望が開けてきた。特に「p4cせんだい」の多くのメンバーが迷っていた「教師の介入のあり方」について、ハワイの先生方から多くを学ぶことができた。また、写真から問いを出させる手立てや書かせることの大切さについても学ぶことができた。p4cを取り入れた国語の授業を提供した際には、ハワイにおける評価基準を示していただくこともできた。本学では、3つの授業の中でp4cの取組が行われた。実際にコミュニティボールを使っただけのセッションでは、次第に考えが深まっていく手応

えを感じ、参加者全員がp4cの効果を実感できた。

## イ 日本教員によるハワイ訪問

8月。今度は「p4cせんだい」のメンバーである推進校の教員3名が、本学の見上学長、教育復興支援センターの野澤副センター長と小田特任准教授とともに、ハワイを訪れた。3名のメンバーはそれぞれに明確な課題を抱えての海外研修であった。ハワイでは、ワイキキ小学校やカイロア高校、ワイマナロ小中一貫校でのセッションに参加するとともに、ハワイ大学での研修会にも参加した。ハワイではp4cを日常的に取り入れており、教科指導のあり方などについて見聞を広めるとともに、それぞれの課題について明るい見通しが持ったの帰国となった。

## (3) 第3期(拡大期:発信を通して) 2014年10月~2015年3月

この拡大期には2つの特徴がある。一つは、国語や社会、道徳や総合的な学習の時間など、通常の授業場面でのp4cの活用が進んだこと。もう一つは、一般教員への周知・啓発の方法として、教員によるp4c体験を取り入れ、普及させたことである。

教科指導への導入については、小学校の国語科と道徳及び総合的な学習の時間において、p4cを効果的に用いた授業が行われた。中学校では、社会科の授業にp4cを取り入れ、その有効性を探った。仙台市小学校特別活動研究部会での授業提案や、仙台市教育センターによる「授業づくり訪問」の際にもp4cを活用した道徳と生活科の授業を提案するなどした。

この第3期には、校長会を通じた広報によって、10月と11月に行われたp4c公開授業には、仙台市内から多くの先生方が参加するとともに、白石市の武田教育長からの声かけによって、白石市の小中学校から数名の参加者もあった。この時期からは、「参加者によるp4c体験」の時間を設定することとした。その結果、「ボールを作りながら話すと、周囲の視線を気にすることなく、緊張せずに話せる」などといった、参観しただけでは分からない効果も実感でき、参加者のp4cに対する理解を一気に深めることができた。

こうしてp4cの深まりと広がり生まれた背景には、毎月開催された夜の研修会がいっそう充実してきたことに加え、p4cについての様々な情報発信があったことを忘れてはならない。日本教育新聞におけるp4c実践の記事の掲載、全国教育系大学研究協議会での研究発表、仙台市小学校教育研究会特別活動研究部会での授業提案、仙台市教育課題研究発表会での5本の研究発表など、様々な場での様々な形による情報発信に

よって、p4cに対する関心が高まり、p4cの普及・啓発が大きく進んだことは、特筆に値する。併せて来年度のp4cの充実・発展への期待がいっそう高まる拡大期となった。



## ③ 成果と課題

### (1) 成果

これまでの実践の中から「子どもの変容が確認できたこと」と「教師の新たな気づき」ということに焦点を当て、それを根拠としながらこれまでの実践の成果を次のようにまとめることができた。

- ① ボールを持った人だけが話せるというルールがあることによって、仲間の話を静かに聞くことができるようになった。「もっと話したい」という思いが、「我慢して聞く」態度につながっている。
- ② みんなが聞いてくれるという環境が整うと、話したいという気持ちが湧き起こり、普段話さない子ども安心して話すようになった。ボールを手にするという話しやすくなるということと併せ、セーフティが確保された証。
- ③ 「正解がない問い」ということで、子どもたちは間違いを怖れず、安心して考えることができた。
- ④ 問い返しの度に、子どもたちの考えが深まっていくのを感じた。
- ⑤ 普段は見えない子どもの考えや思いの深さを知ることができたし、学級内の人間関係もつかめた。
- ⑥ 教室に掲示している「なぜ?」「本当かな?」というキーワードが、他の授業での思考にも役立っている。
- ⑦ 教師も立場を離れ、コミュニティの一員として参加することによって、じっと発言を待つなど、普段とは異なる関わりをすることができた。

## (2) 課題

- ① 適切な人数や時数の確保、教科指導での活用方法については、今後も研究を進めていく必要がある。また、どんな「問い」がよいのか、また「問い返し」のセンスをどう磨くのかを探っていくことも大切である。
- ② これまでは小学校での実践が多かったが、今後は、実践の場を中学校や高等学校、大学にまで拡大するとともに、社会教育関係にも実践の場を求めていく。そうした中で、校種などの違いによる成果と課題を明らかにすることが期待できる。
- ③ これまでの成果をもとに、分かり易い啓発リーフレットや資料の作成、および情報発信の工夫・開発に力を注ぎ、p4cのよりいっそうの普及・啓発に努める必要がある。

## ② 学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業～教育復興の担い手の育成～

東日本大震災から4年、教育復興を推進するには、担い手の育成が重要である。宮城教育大学の本務である教員養成という人材育成に加え、昨年度から教育復興支援センターを中心として、地域社会を豊かにするために活動する市民の育成、防災リーダーの育成に取り組み始めた。教育大学として新たな境地を開いたが、その中核となったのが、平成25年度から文部科学省から受託され、今年度2年目となる「学びを通じた被災地のコミュニティ再生支援事業」である。厳しい生活を余儀なくされる被災地の人々にとって、互いに助け合い、支え合うコミュニティの存在は、欠かせないものである。コミュニティの核になる人材を育成し、自分たちの手でまちをつくり上げたとき、真に復興が実現したと言える。これからの社会を担う子どもたちの育成はもちろんだが、今の社会を支える人材を育成することも教育大学としての新たな使命と考えている。

被災地の復興ニーズをとらえた平成26年度事業の「4本柱」(①防災教育 ②心とからだ ③生き方 ④地域づくり)の中から、3つの事業を紹介する。

被災地の復興ニーズをとらえた  
平成26年度事業の「四本柱」

### 1 防災教育

学校をはじめとする教育機関と地域の人びとが協力して取り組む、多角的な防災教育を展開、支援します。

- 防災防災世界会議への参画（一般事業）
- 地域のネットワークを活かす
  - 防災教育の取り組み
  - 防災連絡会等協議会の開催
  - 教育関係者の交流事業等

### 3 生き方

子どもたちが被災した経験を活かして生きる力を身につけられるよう、キャリア教育の観点から実施する活動を展開、支援します。

- 震災の記憶をつなぐ伝承事業（高校生キャリア教育）
- 「4K（子どものための生き方）」を中心とした生き方を考える取り組み
- キャリア教育に関する研究プロジェクト

【事業の実施体制】

### 2 心とからだ

震災によって引き起こされたストレスについて、心身両面から改善する活動を展開、支援します。

- 教育支援員研修などによる教育者の心のケア
- 被災地における調査研究の取り組み
- 文庫における運動環境改善の取り組み
- 震災後3年を経た被災地における心のケア
- 震災を遺した子どもによる地域復興

### 4 地域づくり

コミュニティ再生を支える地域連携の仕組みを構築するとともに、人材の育成を進める活動を展開、支援します。

- 被災地を巡った地域づくりと被災地への支援
- 学生による学生被災地支援「地域コミュニティ・復興支援」
- ソーシャルキャピタルに関する研究
- 土曜日の教育活動の支援

## (1) 市民向け防災講座 「再(また) AERで学ぼう！宮教大防災3Days」

東日本大震災の風化が懸念される今、被災地の復興について様々な角度から共に考え、課題を共有していくことが重要である。いずれも市民一人一人が確かな情報と知識をもとに、自ら考えて行動していく姿勢が求められている。本センターでは、「知」「地（地域）」の拠点として、学校教育だけでなく広く一般の市民を対象とした開かれた社会教育を展開している。

「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」の一環として、昨年度に引き続き、「再(また) AERで学ぼう！宮教大防災3Days」と題して、3日間で15の講座を開催した。講座は、「復興」や「防災」について様々な角度から考えることをテーマとし、学生によるボランティア活動や被災地視察研修の報告、現職教員による被災地の現状と課題についての発表、NPO法人職員によるボランティア組織論など、多彩な講師陣が出講し、その取組や活動成果を発表し、前回の講座からさらに深まった内容を提供できた。

研究開発部門

28

東日本大震災

広く市民の方々へも復興支援や防災に関する学びの機会を提供しようと企画したもので、一般の方が参加しやすいよう大型商業施設アエル内の公開スペースで開催された。

初日には、本学学長と河北新報社の武田論説委員による対談が行われ、震災から3年半が経過して懸念されている「記憶の風化」について、それを防ぐための様々な取組、被災地にある教員養成大学としての本学に対する期待などが語られた。

初日と最終日に行われた防災士による「防サイエンスショー」では、来場した子どもたちが実験に参加し、楽しみながら地震のメカニズムや効果的な防災グッズの利用法を学んだ。

クロージングでは、平成27年3月に仙台市で開催される国連防災世界会議への気運を高めようと、仙台市総務局の準備担当課長らによる鼎談が行われた。鼎談の中では、世界規模の防災会議が仙台市で開催される意義や、会議の開催が目的（ゴール）ではなく、そこから復興を次世代に繋げていくことの重要性が説かれた。

期間中は、総勢680人の来場者があり、展示スペースに飾られた防災グッズを手に取り質問をする来場者や、復興支援活動の取組を報告したパネルを熱心に見入る来場者などで賑わった。2年間継続して取り組んできた事業だが、大震災から得た学びを多くの方々と共有し、次代へ語り継いでいくことの重要性を再認識させられた。

(2) 高校生キャリア教育講座

東日本大震災を中学生という多感な時期に経験した高校生を対象とし、「仕事と復興」を考え、将来の自分の生き方を決める手助けとなるようにと実施した講座である。好評であった昨年度に引き続き開催され、今年のテーマは「被災地ではたらく先輩の話を聞き、未来を考えよう」である。

講演では、男女共同参画社会の実現に情熱を傾けている女性の団体職員が、ノルウェーで学んだことをもとに女性の社会参画の重要性を語った。また大手書店勤務の職員は、震災後に図書館が果たした役割の大きさについて語り、講師自身がボランティアとして活動している海辺の図書館についても話された。震災で家を失いながら、食材の豊かな地に移り、フランス料理店を再興したシェフの方からも貴重な話があった。

後半は、自分がある職業に就いていると仮定して、復興にどんな役割を果たせるだろうかということについて、8つのグループに分かれて話し合った。ファシリテーターは本学の学生が行ったが、時間の経過とともに、高校生からどんどん考えが出てくるようになり、会場が熱気で満ち溢れた。

この講座には、昨年度に引き続き、地元仙台出身の漫才グループであるニードルの二人も進行に協力して



くれた。彼らは、日頃から仙台自分づくり教育（キャリア教育）の応援団として熱心に活動しており、市内の小中学校に出向いて、楽しい雰囲気をつくりながら児童生徒へ様々なメッセージを伝えている。

平成27年2月にキャリア教育推進法が制定され4月から施行されることとなるが、全国の自治体にはキャリア教育推進義務、学校現場には努力義務が課せられる。今後、キャリア教育が一挙に推進されることとなるが、教育大学として先んじて提供してきたこの講座の意義は、一層大きなものとなる。学校現場で展開される日常の学習に加え、社会教育と協働で展開する本講座のような取組も、さらに活発に展開していくことが必要である。

### (3) 教員支援情報誌「ちょっとたいむ」

東日本大震災が発生した際に、人命救助、捜索、瓦礫撤去から復旧に向けて、自衛隊や、消防、警察、水道、電気・ガスなどの職員が、全国からの応援を得ながら夜を徹して作業を続けた姿は、目に焼き付いている。被災者がどれほど勇気を与えられ、元気をもたらしたか言葉では表せないほどである。

同様に、学校現場で子どもたちの命を守り、避難してきた人々を支えるために、献身的に取り組んだ教職員にも多くの賞賛が寄せられた。

通信網が断絶した中で、一刻も早く児童生徒の安否を確かめたいと、それぞれの家庭へ出向き、さらには避難所を回りながら、一人一人安否を確かめていった。中には遺体安置所での対面もあったと聞く。また、避難所では、備蓄食料や救援物資の分配、水やトイレの確保など、避難所運営の先頭に立って活動した。

子どもや地域のためにと頑張ってきた教師たちにも、少なからず疲労感や虚脱感が目立つようになってきた。震災以後、自分の生活は二の次にしながら休まず頑張ってきたことを思えば、当然のことであろう。そこで、本センターでは、こうした学校現場の教職員への支援を行いたいと考えた。そこで生まれたのが教員対象の情報誌「ちょっとたいむ」である。この表題には、肩の力を抜いて、先生方にもほっと一息ついてもらおうという思いが込められている。また、同じ教職員仲間でも、お互いの被災の状況や復興の現状については、知らないことが多いことから、それぞれの地域の状況や今後の課題について、県内の教職員が情報を共有する手だてにしたいと考えた。

県内の被災地の学校を取り上げた特集。創刊号は県北にある「南三陸町」、第2号では「仙台市内」、第3号では県南の「亶理町」の被災校を訪問し、教職員の様々な思いを取材した。第4号は、海岸部に比べあまり紹介される機会の少ない内陸部に視点をあて、「大崎市古川」の小中1校を訪問取材した。取材を通して、「傷ついた子どもたちの教育と心のケアを重視するあま



り教員自身のことを後回しにしている実態」「学舎を失い、数年後の閉校・統合を控えた学校の子どもたちの成長を支える若手教員の頑張り」「津波被災から校舎の改築、新築を経て、町の震災復興計画に基づき地域とともに防災教育を進める実践」など、これまで語ることの少なかった被災校の先生方の思いを共有できる情報誌となった。予想以上に評判がよく、今後に期待する声も大きい。





# IV

# 人材育成

## 1 ボランティア協力員

### 1 発足の経緯

24年4月、本センターが本格的に始動した。それ以前も被災地の教育委員会や学校から学生ボランティアの派遣要請がありそれに応えてきたが、これらの要請は5年、10年継続されるとの見通しがついた。

そこで24年6月、新入生から専攻ごとに有志1～2名を選出しボランティア協力員とした。協力員は本センターと全学生とをつなぐ役割であり、自らさまざまな活動に意欲的に参加するとともに各専攻の先輩、仲間呼びかけ各種ボランティアの派遣要請に応える人材確保をめざしたものである。

### 2 組織と分担

総会に出席した有志学生のなかから各学年の代表、副代表を選出するとともに、自薦により運営委員会を組織し、下記の各分担で企画、検討された案を審議し、承認を受け、それに基づいて各種会合等が実施されている。

26年度の組織、担当者数は以下のとおりである。各組織は1～2年生が担当し、各係とも一部を除いて2年生がチーフである。3年生はオブザーバー的な立場とし、適宜企画に参加し前年度の経験に基づく助言を行うシステムである。

- 1 総会 (3名)
- 2 不安解消会 (6名)
- 3 大学祭 (6名)
- 4 ボランティア報告会 (6名)
- 5 実態調査 (6名)
- 6 オープンキャンパス (6名)
- 7 DVDの作成 (若干名)  
26年度の活動をまとめたもの
- 8 その他 (ホームページ, 掲示, 被災地視察研修, 国連防災世界会議) (若干名)



### ③ 主な活動

#### ●総会 4月23日

役員紹介, あいさつ

前年度の活動報告(全体・個別)。

ボランティア協力員の説明, 運営委員への勧誘。

ボランティアへの積極参加と情報連絡方法の周知。新入生代表・副代表の選出(自薦, 承認)。

#### ●不安解消会 7月16日

初めてボランティア活動に参加するにあたっての不安を取り除くために開催するもの。2年生のボランティア活動経験者による体験談, アドバイスが中心。

「ボランティアの心構え」「不安解消Q & A」の作成, 配布。

### 不安解消Q & A

**被災した子どもたちに接する際、何か気をつけることはありますか?**

震災や被災状況についての話題は、持ち出さないように気をつけてください。筆者も被災者の一人ですが、普段震災を思い出すことは少なく、元気に過ごしています。しかし、震災の話題に触れると、辛く悲しい気持ちになります。よって、震災の話題は避け、ごく自然に明るく接しましょう!

**指導の際のポイントはありますか?**

子どもたちは、夏休みの期間にせつ々学校にきているのですから、単なる答えあわせにならないようにしましょう。分からない問題は一緒に考えてあげるといいですね。また、勉強法をアドバイスしてあげるのも良いかもしれません。

**学習支援のボランティアに参加するのは高校生だけですか?**

全国の教員養成大学など、他大学と連携することも多いです。今回のボランティアが、他大学との交流の良い機会になるかもしれませんね。

**最初の一言をかけるのが難しいです。アドバイスはありませんか?**

「ほめること」から始めてみてはどうですか?  
「よく来たね」「字がきれいだね」「頑張っているね」  
何でもいいです。子どもたちは学生からの声を待っていますよ。

**長期の宿泊があるボランティアでは、ボランティアの時間以外は何をするのですか?**

宿泊先の教育委員会の配慮により、研修会、被災地研修が行われることもあります。

**指導のために、何か事前準備は必要ですか?**

多くの学校では自学自習の支援を行うので特に必要ありませんが、一部の学校では授業形式をとり、事前に教材を作成する場合があります。(くりはら塾、中学校)

**担当する児童・生徒の人数はどれくらいですか?**

一般的には1学級20~30名を2、3人で担当することが多いです。1対1対応の場合もあります。








その他の疑問点は、ボランティア協力員や教育復興センターへ相談を。☎214-3667

#### ●オープンキャンパス 8月1日(秋のミニオープンキャンパス 10月5日)

高校生に教育復興支援センターやボランティア協力員, 運営などについて知ってもらい, 興味をもってもらおうと企画。OCツアーに参加している高校生にポスター掲示とともにセンターやボランティアについて説明を行う。参加した高校生には説明を聞いての感想や今思っていることを付箋に書いてもらい, 後日掲示した。直接センターを訪れた高校生には, 上述のDVDの上映やセンターの刊行物を配布した。



## ●大学祭 10月25日～26日

### 〈展示の部〉

学習支援ボランティア活動, 防災グッズ (新聞紙スリッパ, ローソク), 工作

### 〈発表の部〉

映画上映と講話

意見交換会 (子どもに震災を伝える)

展示ブースでは, 今年度実施した6つの学習支援ボランティア等の活動の様子が描かれたパネルが展示され, 協力員が来場者へ展示資料の説明にあたった。また, 来場者と防災グッズ (ローソク, スリッパ) 作製を行い, 交流を深めた。

映画上映では, 日系アメリカ人監督が製作した東日本大震災の姿「Stories from Tohoku」を上映し, その後, カリフォルニアから来日した日系アメリカ人である本学研究生による講話「日系アメリカ人から見た震災」を行った。

意見交換会では, テーマを「子どもに震災を伝える」とし, はじめに学校の被災状況や新しい防災教育の実践事例を2名の先生に講演をいただいた後, 参加者を2グループに分けて意見交換を行った。震災を伝えることの大切さや難しさなど貴重な意見が寄せられた。

今回の大学祭への企画運営にあたって, 学生主体の活動と内容になるよう話し合いを重ね, 大学祭の広報活動の工夫や出席者参加型の意見交換会などを設定するなど, 積極的な取組が行われた。



## ●ボランティア報告会 (第2回総会) 1月21日

協力員の活動報告 (不安解消会, 大学祭等の担当者)

各ボランティア活動報告



## ◎参加学生の感想・礼状等

### ○栗原市内小学生(学府くりはら塾)(3年女子)

私は今年度夏休みに6年生、冬休み3・4年生のサポートに入りました。(略)3年生の場合、集中力が切れてきたときにどのような声かけを行い最後まで学習に向かわせればよいのか、6年生の場合、自ら学習できるため逆にどのタイミングでどのような声かけを行えばいいのか迷うこともありました。活動を振り返ってみて今思うことは、子どもたち一人一人をよく見て、そのこの性格に合った声かけを万遍なく行えばよかったということです。自分自身が子どもたちに遠慮してしまい、一人一人に声かけができなかったように思います。単に子どもたちがつまずいているところの指導を行うだけでなく、「字が丁寧だね」「姿勢がいいね」などといったよいところを褒める声かけもできればよかったなと思います。

### ○女川町小中学生への学習支援(2年女子)

女川は初めていく場所だったが、被災地のなかでは復興は進んでいる方かなと感じた。しかし、校舎から見える景色はトラックや工事現場で、周りには仮設住宅が立ち並び、子どもたちが元気に遊べるようになるにはまだまだ時間がかかると思った。女川の方たちはみな温かく、たくさんのことを教えてくれた。また、宮教生だけではなく、福岡教育大の学生とも一緒にボランティアをしたことで、他大学との交流を深めることができ、より充実したボランティアになったと思う。ボランティアをしに行くだけではなく、被災地の状況を観察することもでき、私自身とても勉強になった。とても有意義な5日間であった。

### ○仙台市立中野小学校での教員補助(4年男子)

一人一人の活動がより意味のあるものになるよう、ミーティングを週1回のペースで開きました。気になる子どもの情報共有や、関わり方への不安解消、全体的な活動方針の話し合いなどが目的です。しかし、必要感をもてるようなミーティングの運営にはまだまだ遠く、ミーティングをしなければならぬものと位置づけてしまっているため、「できる人ができるときにやる」という空気感を作れていないような気がします。未永く、お互いにとって有意義な活動を行うためには、どのようなミーティングを行っていけばよいか、考えなくてはなりません。学習支援ボランティアとして、基本的にやることは変わりません。しかし、来年で閉校してしまうこともあり、この活動がどのようなことを目指すべきなのかは、一人一人が考えるべき課題となります。前年度の反省をできる限り生かし、子どもたちを支える存在になれるよう、関わりを続けてほしいです(私自身が卒業してしまうので)。

### ○登米市立南方中学校での学習支援

(京都教育大学院生) 今回の活動をとおして、新たな出会いのすばらしさや、あらゆる人々への感謝の気持ちに改めて気づくことができました。参加者一同、人としても、教師を目指す者としても、また一つ成長できたのではないかと感じております。この経験から学んだことや考えたことは、今後の学習や教師人生を歩んでいく上で存分に生かし、頑張っていく所存です。

(大阪教育大学生) 南方中学校で過ごした5日間はとても充実していました。子どもたちからたくさんのお元気をいただき、いろいろなことを学ぶことができました。「参加してよかった！」と学生はみんな言っていました。このような機会を用意してくださり、本当にありがとうございました。今回学んだことを自分たちの大学生活や将来へ生かしていきます。私事ですが、これまでの経験を自分が教師になったとき、伝えていきたいと思います。

## 2 学生企画

### 1 被災地視察研修(気仙沼市・南三陸町, 南相馬市, 荒浜・関上地区)

26年度も、5回にわたり学生企画の被災地視察ツアーを開催した。本年度の特徴は、多くの学生が参加できるようにと同地域の半日コースを2回設けたことである。

6月14日(土) 気仙沼市・南三陸町コース 参加者33名

第18共徳丸到達地点⇒ リアスアーク美術館⇒ 気仙沼向洋高等学校⇒ 南三陸町防災庁舎⇒ 南三陸町自習支援室(TERACO)

6月15日(日) 仙台市荒浜・名取市関上コース(半日) 参加者19名

荒浜小学校⇒ 荒浜地区慰霊塔⇒ 関上中学校⇒ 日和山⇒ メイプル館・関上朝市⇒ 岩沼千年希望の丘

6月28日(土) 仙台市荒浜・名取市関上コース(半日) 参加者21名

荒浜小学校⇒ 荒浜地区慰霊塔⇒ 関上中学校⇒ 日和山⇒ メイプル館⇒ 岩沼千年希望の丘

6月29日(日) 山元町・南相馬市コース 参加者39名

中浜小学校⇒ 南相馬市小高区市街地域⇒ 小高区村上地区

11月30日(日) 石巻市・女川町コース 参加者23名

門脇小学校⇒ 女川町江ノ島会館, 女川地域医療センター⇒ 女川町復興住宅・仮設住宅(運動公園等)⇒ 大川小学校



20 mを越える津波により倒された4階建ての江ノ島会館についての説明 =女川町=



落ち葉などの家庭ゴミが、敷地内に放置されている現状についての説明 =南相馬市小高地区=



津波被災した関上中学校の状況について、当校を卒業した学生が説明 =名取市=

## 2 講習会等

### iPad講習会 11月5日

国連防災世界会議に向けて、本センターの活動を紹介する動画作成のための講習会。参加者は本センター貸し出し用のiPadを活用し、写真撮影を行いプレゼン用に加工した。完成した動画は、開催期間中せんだいメディアテークやフォーラム会場で上映された。

### ボランティア報告会 2月4日（復興カフェとしても開催）

仙台市立中野小学校（T2・放課後支援，27年度末に閉校することが決定している）

津波により校舎を失い、近隣校の一部で学んでいる同校の子どもたちの学習支援や放課後の遊び相手，学校行事補助として10数名がチームを組んで支援を継続してきた。ボランティア学生の確保，日程調整，情報の共有など難しい問題を抱えている（また，仙台市立荒浜小学校についても同様の趣旨の報告があった）。





### ③ 『エクスカーション』（被災地案内） 18日

ボランティア活動の一環として取り組んできた「学生企画・被災地視察研修」の実績が評価され、仙台市荒浜・名取市閑上方面へのバスツアーの企画運営にあたるもの。

仙台市立荒浜小、名取市立閑上中の旧校舎、日和山等見学先やトイレの場所と現状の把握など現地調査を繰り返し「おもてなし」に心がけている。また、英語によるパンフレットづくりや、スピーチ訓練にも励んだ。



洞口家住宅（茅葺き家屋、いぐね）



海外からの参加者と共に（閑上）

### ④ その他

#### ◎展示

本センター、ボランティア協力員の多様な活動を展示するブースがあり、活動内容を説明したり、仙台駅や各会場で案内・誘導にあたった。



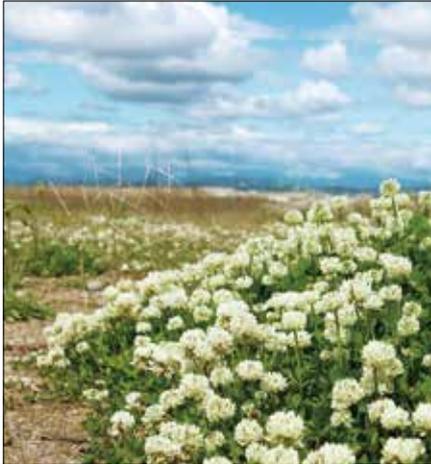
展示（せんだいメディアテーク）



学長、センター長への説明

## ◎「3.11を忘れない」の刊行

この小冊子は、ボランティア協力員の学生が外国を訪問する際、東日本大震災について知ってもらうために、英文で綴ったものである。国連防災世界会議が仙台で開催されることになり、多くの人々に実情を知ってもらうために、本学や他大学の教員、留学生の協力を得て、日本語を含め7か国語に翻訳することができた。フォーラムや展示会場で配付したところ好評で、多くの人々の手に渡すことができた。



3.11を忘れない  
Reminder of 3.11

私たちは将来、被災した子どもたちのための教員になりたいと考えており、その前になるべく数多く被災地の学校での復興支援ボランティアを行いたいと考えています。

We'd like to be teachers in the disaster area in the future, and before that, work as volunteers in schools there as often as we can.

Gusto naming maging mga guro sa mga lugar na hinagupit ng sakuna, at bago iyan, tumulong sa mga paaralan doon hangga't sa aming makakaya.

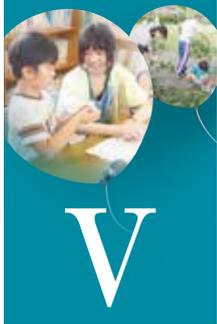
저희는 앞으로 피해를 입은 아이들을 위한 선생님이 되고 싶습니다. 그렇게 되기 위해 우선은 피해지역에 있는 많은 학교에서 봉사를 하려고 합니다.

Nous voulons devenir des professeurs dans les zones affectés par le désastre, et souhaitons avant cela travailler autant que possible dans les écoles en tant que bénévole.

我们希望成为帮助受灾儿童的老师, 并且在这之前也尽可能地参加了各种受灾学校复兴支援志愿者活动。

Wir möchten gerne weiter im Bereich der Disaster Hilfe arbeiten. Schon jetzt geben wir Informationen in Schulen.





踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から4年を経て

# 刊行物

## 1 教育復興実践事例集「明日の子どもたちのために」(第3集)

仙台市立小・中学校校長会

仙台市内小・中学校の、震災から学ぶ教育や復興を目指すさまざまな教育実践は、本学との連携を通して教育復興実践事例集(第1集・2集)にまとめられ、「これは防災教育のカリキュラムである」と、各方面から高い評価をいただいている。

今年度も、その後に取り組みされたさまざまな実践をまとめた第3集を、仙台市立小・中学校校長会と、宮城教育大学教育復興支援センター(学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業)と連携協力のもと、発刊することができた。

第3集の特徴は、各校長の学校経営、被災校6校の今、防災モデル校の取組などこれまでの括りに加えて、心の支援に関する事例を取り上げたことである。震災の記憶を風化させることなく、震災から4年目の各学校の取組を記録し、その歩みを共有することは、明日を生きる子どもたちにたくましく生き抜く力を育む、新たな教育の推進につながるものである。



## 2 「被災から前進するために—未来へのメッセージ」(第3集)

気仙沼市教育委員会, 気仙沼市立小・中学校校長会

気仙沼市内小中学校の各校長が震災直後どのように対応したか、将来への課題と展望を記した第1集, 2年目を迎えた各学校の取組, 創意工夫, 校長の思いを綴った第2集に続いて, 第3集では, 子どもたち, 保護者・支援者, 教員からの「未来へのメッセージ」が綴られた記録集である。次世代を担う子どもたちのたくましさ, 気仙沼市の復興に向けた力強い歩みを実感できる。

巻頭の白幡教育長による「津波と心のケア」では, 昭和8年の三陸大津波後の精神作興運動, オーストラリアの国家的プロジェクト「マインドマターズ」が紹介され, 気仙沼市における今後の精神健康の方向が示唆されている。

また, 階上中学校の「地域連携型防災教育」, 小原木中学校の「海拔表示プロジェクト」を例に, 「持続可能な開発のための教育(ESD)」の取組が, 危機管理や防災・減災等においてどのように機能し貢献したかを検証している。

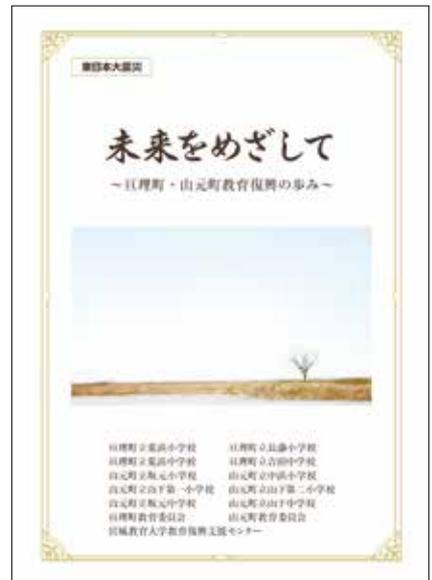


### 3 「未来をめざして～亘理町・山元町教育復興の歩み～」

亘理町・山元町教育委員会，同町立小・中学校校長会

亘理町・山元町の両町は，今回の震災で広範囲に津波浸水がみられ，深刻な被害を受けた地域の1つで，学校施設などに甚大な被害を被った中，亘理町，山元町の両教育委員会や各学校の先生方が懸命に児童生徒の生命を守り，学校と地域が連携し教育復興にあたられてきた。特に，津波被害が大きかった学校は，一時町内の学校に移った後，更に再建された学校に移るなど，激動の4年間を送られた。

困難を極めながら学んだ熱い思いを形に残すために，亘理町，山元町の両教育委員会の連携のもと，両町内の10小中学校の復旧復興に向けて取り組んだ震災記録集「未来をめざして～亘理町・山元町教育復興の歩み～」としてまとめた。内容は，平成26年8月に同じ敷地に再建された亘理町の長瀬小学校や荒浜中学校の被災から学校再開までの経緯や山元町の中浜小学校の廃校，統合の流れなど地域復興の中で進められた学校再建について活動がまとめられている。



### 4 故郷復興プロジェクト視聴DVD「ともに，前へ—過去から未来を創ろう，中学生の力で」

仙台市立中学校校長会

仙台市内の小中学校は，津波被害の沿岸部や地盤崩壊などの丘陵部，帰宅困難者であふれた都市部など被害状況は地域によって異なり，各学校ではその後の学校再開や新しい防災教育への取組に向けて創意ある教育活動を展開している。その中で，平成23年度から仙台市教育委員会の復興に向けた取組の一つである「故郷復興プロジェクト」を各学校工夫して実施している。活動に当たっては，児童生徒が保護者，地域及び関係機関と連携して，「自助」・「共助」の力を育み，たくましく「生きる力」を育てるとともに，社会の一員としての自覚を高めることなどをねらいとし，継続して取り組んでいる。



本DVDは，仙台市中学校長会と連携しながら，故郷復興プロジェクトの中で行われる全校集会などで視聴できるものとして製作した。編集にあたっては，震災後の各学校の状況やその後の創意ある防災教育などの取組の様子を本学川村地学研究室などの協力も得ながら内容を構成した。内容は，東日本大震災の発災時の状況や学校の被害状況，新しい防災教育など各学校の活動の様子を10数分にまとめたものである。次年度には第二巻，第三巻の刊行を計画している。

## 5 教育復興支援センター「紀要」(第3集)

1	瀬尾 和太	3.11 津波の教訓 —地域によって異なる死者率が意味するもの—	
2	瀬尾 和太	最近多発している豪雨災害について	
3	小田 隆史	Assisting the Recovery of School Education in National Disaster Emergencies — Roles of Local Teacher Training University in Tohoku	
4	門脇 啓一 吉田 利弘 伊藤 芳郎	教育復興支援センター活動報告 学習支援ボランティア活動等を通じた学生の育成	
5	吉田 利弘	「環境・防災教育」における担当授業の省察 ～「学校安全」に関する2時間の授業を通して～	
6	野澤 令照	市民協働により復興を支える宮城教育大学の新たな取組 コミュニティ再生を目指す新たな活動を通して	
7	庄子 修 堀越 清治	教育現場におけるp4c活用の可能性を探る	
8	川崎 惣一	子どもの哲学(p4c)の意義について — 震災からの復興に向けて／クリティカル・シンキングとの比較を中心に	
9	黒川 修行 佐藤 洋	東日本大震災後の仙台市小学6年生の身長、体重、肥満および痩身傾向児の出現率(平成22年度～平成25年度について)	
10	小畑 千尋 佐藤 里紗 水戸 まりな 山崎 夏実 菊地 真季子 八木沼 賢悟	参加者同士の関わりを目的としたボディパーカッション活動 — 宮城県丸森町立丸森中学校に於ける復興支援—	
11	伊藤 芳郎 朝間 康子	外国人避難者と災害時多文化共生	
12	小野寺 泰子 水谷 好成 小田 隆史 鶴川 義弘 福井 恵子	災害発生時の避難所運営を想定した炊き出し研修の実践	
13	水谷 好成 小野寺 泰子 鶴川 義弘 福井 恵子	屋外体験型研修とものづくりを組み合わせた防災教育	
14	岡 正明 内海 菜央子	塩分を含む土壌で栽培できるアイズプラントの教材化	



踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から4年を経て

# VI

## 外部資金等の獲得

本学が被災地仙台にあり教員養成教育に責任を負う大学として、東日本大震災により甚大な被害をこうむった被災地域への中・長期的な教育的支援を重点的に取り組むため、各種外部資金獲得の申請を行った。

### 1 文部科学省大学改革推進等補助金

#### 大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業

補助金額:51,195千円

##### 事業の目的・必要性

平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、宮城県は生活全般にわたり極めて甚大な被害をこうむり、被災地では未だ避難生活も続いている状況である。しかし、震災からの本格的な復興に向けて自治体を中心に様々な活動が動き出している中、被災地仙台にあり教員養成教育に責任を負う大学として、被災地への中・長期的な教育的支援を重点的に取り組むため、その中核的な学内組織「宮城教育大学教育復興支援センター」を立ち上げ、宮城県教育委員会及び仙台市教育委員会との連携のもと、宮城県の教育の復興、発展をめざすとともに、地域に密着した現職教員支援及び教員養成実践教育を行うものである。

被災地の学校では、授業再開によって明らかになった事実関係が明確化しており、学力低下・学力格差が懸念されている。

- ①教室復旧過程における児童・生徒の学習意欲・態度、集中力、学習達成度における課題の明確化
- ②避難所生活や仮設住宅生活等の家庭環境の変化が与える子どもへの影響
- ③転校を余儀なくされ、離ればなれになった児童・生徒の心的ストレス
- ④家族を失った児童・生徒の癒されない気持ちの潜在化

しかしながら、これら困難な諸課題に向き合っている教職員は疲労が蓄積しており、日々進行する被災の現状認識に伴う心的ストレスの増加、問題をもった児童・生徒に対する心のケアを含む教育の方法に関する知識不足などから、適切な教育環境が確保されておらず、教育復興への大きな障壁となっている上、これらは短期間で解決できる課題ではないものである。本学が被災地域の一日も早い復興のためにできることを考えたとき、中・長期的な教育的支援という視点に基づいた本事業を実施することにより、宮城県の教育復興を図る取組の一つとして寄与するものである。さらに、教員をめざす学生が被災地域に赴き、困難な生活に立ち向かう児童・生徒や教職員と触れ合いながら勉学を教えたり教育活動に携わることは、今後の教員生活に必須となる人間力や教育実践力の向上のための貴重な財産となり得るものである。

## 2 文部科学省「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」

受託金額:4,680千円

### 事業の趣旨

東日本大震災から4年が過ぎ、復興が進む一方で先が見えがたい現実に、仮設住宅や見なし仮設住宅に疲労感や焦燥感が広がってきており、地域コミュニティの再生・復興がままならない中、被災直後とは変化した地域課題が生じてきている。本事業は、そういった課題への対応策を一過性のものとせず、今後の被災地の自律的な復興が長く地域コミュニティに根ざす仕組みづくりを実現するため、産・官・学が連携して以下の事業に取り組むこととした。

- ・地域における活動を担う人材の育成
- ・人と人とのつながりを再生する学びの事業の推進
- ・学校と地域とが協働で取り組む防災教育の創造と実践
- ・コミュニティ再生を支える地域連携組織の構築



### 具体的な取り組み内容

主な事業として、広く地域一般市民に防災や復興に関する多種多様な講座を提供した「宮教大防災3days」、石巻市立門脇小学校の震災ドキュメンタリー上映会、復興支援に携わる演奏家に出演頂いたクリスマスコンサートや、震災復興と自分の進路について考える機会を提供した高校生キャリア講座「被災地ではたらく先輩の話を聞き、未来を考えよう」を開催した。

## 3 復興庁「新しい東北」先導モデル事業

### 教育環境整備モデル化事業

受託金額:3,583千円

### 事業の趣旨

女川町では震災により、本来子どもの遊び場となる公園や校庭等に仮設住宅が設置され、野外での子どもの遊び場が圧倒的に不足している。学校の統廃合や学区外の仮設校舎への通学のため、遠方からのスクールバスの登下校を強いられる児童も多く、生きる力を育むための土台となる体力が著しく低下し、運動不足におちいっている。生活習慣の乱れは心身の発達にも大きく影響することから、行政・町民・大学・学校等教育



関係機関が一体となって、学習習慣の定着・生活環境の改善を目指し、将来を担う子供たちの生きる活力の向上を目指す。

### 具体的な取り組み内容

女川町の小・中学校の特別な支援（不登校等）を要する児童・生徒の現状を把握するため、本学の特別支援教育講座の教員らが、現地視察を行った後、学校教員らと意見交換を行い、対応について指導・助言する等の研修会を行った。また、女川町の児童・生徒を対象に、東北大学加齢医学研究所所長川島隆太教授らによる生活習慣に関する講演会を行った。

## 4 公益財団法人 上廣倫理財団

### プロジェクト研究助成〈p4cせんだい推進プロジェクト〉

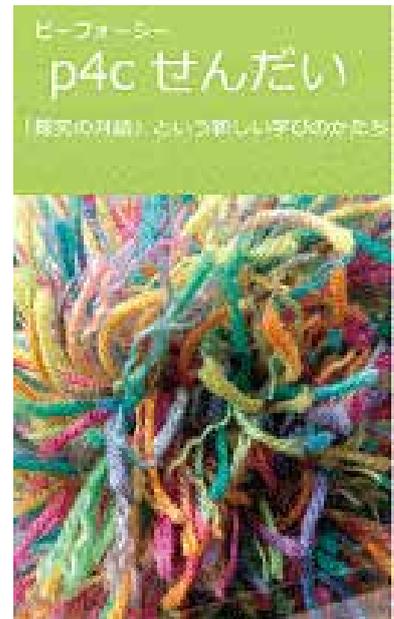
寄附金額:8,000千円

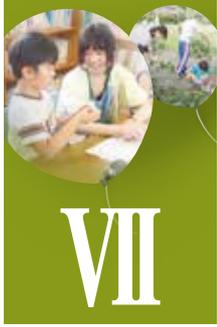
#### 事業の概要

人間の倫理観の育成・教育に関わる研究及び活動への助成を行っている当該財団より、被災地における「命の教育」「生き方教育」に寄与するp4c (philosophy for children:子どもの哲学) 推進への支援をいただいた。大学研究者、学校、企業人など幅広い委員で構成した実行委員会を核に、研究、実践を積み重ねてきた。

震災により発生した家庭や地域環境の激変は、児童生徒の学習意欲の低下や心的ストレス、体力低下など大きな課題をもたらしただけでなく、人生観や価値観を大きく揺るがす状況を生み出した。復旧復興の過程において、さらに根源的な問題が発生してくることが予見されるが、その解決へ導くプログラムとしてp4cのプログラムに着目し、下記のような研修・実践・研究の活動を行うこととした。

従来の大学と教育委員会、学校との連携に留まらず、広く地域や企業なども巻き込んで、児童生徒の考える力やコミュニケーション力、想像力の高揚をめざす取り組みを展開する。またその成果を学生及び地域にも波及させ、p4cが教育復興の一翼を担えるよう強力に推進する。





踏み出そう！子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 震災から4年を経て

# VII

# 資料

## 1 平成26年度 教育復興支援センター活動(事業)実績一覧

		実施場所・学校名等	実施内容	派遣実人数 (他大学内数)	派遣延人数 (他大学内数)	協力・連携大学	備考	
1	継続	仙台市立中野小学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	10			②教員補助事業	
2	継続	仙台市立荒浜小学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	6			②教員補助事業	
3	継続	塩釜市立第一小学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	1			②教員補助事業	
4	継続	仙台市立蒲町中学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	3			②教員補助事業	
5	継続	女川町立女川小学校	教員補助(学生による毎週の自主的な支援)	8			②教員補助事業	
6	4/17~18	仙台市立寺岡小学校・西山中学校	キャリア教育推進の意義と学校現場における効果的な指導のあり方(教員研修)	共催			⑥こころざし・キャリア教育事業	
7	4月23日	宮城教育大学	第1回学生協力員総会	60			人材育成	
8	5月24日	宮城県立石巻支援学校	運動会の準備・運営補助, 児童生徒への活動補助	6	6		②教員補助事業	
9	5月31日	仙台市立荒浜小学校	運動会の準備・運営補助, 児童生徒への活動補助	17	17		②教員補助事業	
10	6月3日	大和町立鶴巣小学校	総合学習における体験学習での指導支援	18			④こども対象・参加イベント事業	
11	6月6日	岩手県立生涯学習推進センター	学校と地域の融合～学校支援ボランティアが秘めている可能性～	派遣			③教員研修事業	
12	6月7日	松島水族館	こども☆ひかりフェスティバルの補助	11			④こども対象・参加イベント事業	
13	6月11日	宮城教育大学	第11回復興カフェ	21			研究開発事業	
14	6月14日	気仙沼向洋高等学校跡 他	第15回被災地視察研修	33			人材育成	
15	6月15日	仙台市立荒浜小学校跡 他	第16回被災地視察研修	19			人材育成	
16	6月21日	岩沼市陸上競技場	岩沼市中総体(陸上競技)の実施・運営の補助	10	10		②教員補助事業	
17	6月25日	宮城教育大学	仙台市立中野小学校「ヤギふれあい体験活動の実施」	主催			④こども対象・参加イベント事業	
18	6月28日	仙台市立荒浜小学校跡 他	第17回被災地視察研修	21			人材育成	
19	6月29日	山元町中浜小学校跡 他	第18回被災地視察研修	39			人材育成	
20	7月9日	石巻市鹿妻地区	東北大学災害科学国際研究所「鹿妻復興マップづくり」	3		東北大学災害科学国際研究所	研究開発事業	
21	7月16日	宮城教育大学	夏休みボランティア不安解消会	50			人材育成	
22	7月18日	美里町駅東交流センター	子どもと向き合うための学び相談員・支援員としての心構え	共催			③教員研修事業	
23	7/22~7/30	塩釜市立第三小学校	自学習支援(小3~小6年生対象)	7	10		①教育復興支援事業	
24	7/31~8/6	大崎市立古川東中学校	自学自習支援(小5・6年生及び中1~3年生対象)	2	(2)	4 (4)	愛知教育大学	①教育復興支援事業
25	8月3日	仙台市立西山中学校	女川町民を対象とした交流イベント	共催		11	④こども対象・参加イベント事業	
26	8/4~8/8	気仙沼市内小・中学校	自学自習支援(小3~6年生及び中1~3年生対象)	12	(2)	32 (10)	早稲田大学	①教育復興支援事業
27	8/4~8/8	色麻町立色麻学園①	自学自習支援(小3~6年生及び中1~3年生対象)	2		2	①教育復興支援事業	
28	8/4~8/8	大和町立宮床中学校	自学自習支援(数学・英語, 中1~3年生対象)	4		12	①教育復興支援事業	

		実施場所・学校名等	実施内容	派遣実人数 (他大学内数)		派遣延人数 (他大学内数)		協力・連携大学	備考
29	8/4~8/8	大河原町内中学校	自学自習支援(中1~3年生対象:大河原中・金ヶ瀬中①)	7		14			①教育復興支援塾事業
30	8/4~8/8	登米市立南方中学校	自学自習支援(主に中3対象)	15	(15)	75	(75)	京都教育大学 大阪教育大学	①教育復興支援塾事業
31	8/5~8/11	角田市立角田小・中学校	自学自習支援(角田小学校,角田中学校)	7		8			①教育復興支援塾事業
32	8/6~8/12	大崎市立古川中学校	自学自習支援(小5・6年及び中1~3年生対象)	5	(2)	10	(3)	愛知教育大学	①教育復興支援塾事業
33	8/6~8/8	名取市立関上中学校①	自学自習支援(5教科・中1~3年生対象)	4		9			①教育復興支援塾事業
34	8/7~8/11	本小牛田コミュニティセンター	自学自習支援(中1~3年生:小牛田中学生会)	3		5			①教育復興支援塾事業
35	8/7~8/8	丸森町立丸森中学校	自学自習支援(5教科・中1~3年生対象)	5		10			①教育復興支援塾事業
36	8/9~8/11	明成高校(茂庭荘)	学習支援(小論文・英語・数学)	2		6			①教育復興支援塾事業
37	8/16~8/20	栗原市教育研究センター	中学生を対象とした「学府くりはら塾」での講師(3教科,教材作成・指導を含む)	21		63			①教育復興支援塾事業
38	8/18,21	富谷町立富谷第二中学校	自学自習支援(中1~3年生対象)	6		9			①教育復興支援塾事業
39	8/18~19	大河町立金ヶ瀬中学校②	自学自習支援(中1~3年生対象)	2		3			①教育復興支援塾事業
40	8/18~8/19	名取市立関上中学校②	自学自習支援(中1~3年生対象)	6		12			①教育復興支援塾事業
41	8/18~8/20	色麻町立色麻学園②	自学自習支援(小3~6年及び中1~3年生対象)	1		3			①教育復興支援塾事業
42	8/18~8/20	仙台市立蒲町中学校	自学自習支援(5教科)	8	(2)	24	(6)	東北学院大学	①教育復興支援塾事業
43	8/18~8/20	富谷町立日吉台中学校	自学自習支援(中1~3年生対象)	5		8			①教育復興支援塾事業
44	8/18~8/20	南三陸町立志津川中学校	自学自習支援・部活動支援	11	(8)	33	(24)	愛知教育大学	②教員補助事業
45	8/18~8/20, 8/22	富谷町立富谷中学校	自学自習支援(中1~3年生対象)	5		12			①教育復興支援塾事業
46	8/18~8/21	大崎市立古川南中学校	自学自習支援(中1~3年生対象)	2		7			①教育復興支援塾事業
47	8/18~8/21	女川地区小・中学校および仮設住宅	自学自習支援	18	(6)	47	(24)	福岡教育大学	①教育復興支援塾事業
48	8/18~8/22	塩釜市内4中学校	自学自習支援(中1~3年生対象)	9	(7)	45	(35)	東京学芸大学	①教育復興支援塾事業
49	8/18~8/22	柴田町立槻木小学校	自学自習支援	1		5			①教育復興支援塾事業
50	8/18~8/22	南三陸町立戸倉小学校	自学自習支援・環境整備(全学年)	8	(4)	38	(20)	奈良教育大学	①教育復興支援塾事業
51	8/18~8/22	大郷町立大郷小・中学校	サマースクール講師・自学自習支援	14		35			①教育復興支援塾事業
52	8/18~8/22	登米市内小・中学校(迫地区)	自学自習支援(小3~6年生及び中1~3年生対象)	5		11			①教育復興支援塾事業
53	8/19~8/20	大衡村立大衡中学校	自学自習支援(5教科)	2		4			①教育復興支援塾事業
54	8/19~8/21	岩沼市中央公民館(仮設住宅入居小・中学生)	自学自習支援(仮設に入居している児童,生徒対象)	5		13			①教育復興支援塾事業
55	8/19~8/21	岩沼市立玉浦小学校	自学自習支援	6		14			①教育復興支援塾事業
56	8/20~22	栗原市文化会館・教育研究センター	自学自習支援(小学生版「くりはら塾」での講師)	12		31			①教育復興支援塾事業
57	8月21日	栗原市志波姫小学校	防災教育校内研修	派遣		20			③教員研修事業
58	8月23日	TKP新宿ビジネスセンター	関東圏同窓生ネットワーク総会 研修会「防災教育シンポジウム」	共催		35			③教員研修事業
59	8/29~8/30	奥松島市立鳴瀬未来中学校	運動会の準備・運営補助,児童生徒への活動補助	19		38			②教員補助事業
60	9/1~9/3	南三陸町立志津川小学校	教員補助	6		18			②教員補助事業
61	9/16~9/19	南三陸町立名足小学校	教員補助	5	(1)	17	(4)	群馬大学	②教員補助事業
62	9/17~9/20	福島県会津若松市(大熊幼稚園,大熊小・中学校)	教員補助	10		40			②教員補助事業
63	9/19~9/21	アエル2階アトリウム	佐藤静教授/宮教大防災3days「災害後の生活と心のセーフティネット」	—					⑤心のケア支援事業
64	9/22~9/26	丸森町立丸森小学校	教員補助	12	(5)	53	(25)	奈良教育大学	②教員補助事業
65	9/5, 12, 19, 26	女川町立女川小学校	教員補助	12		22			②教員補助事業

東日本大震災

		実施場所・学校名等	実施内容	派遣実人数 (他大学内数)	派遣延人数 (他大学内数)	協力・連携大学	備考
66	10月15日	栗原市文化会館大ホール	学府くりはら学力向上講演会	派遣	360		③教員研修事業
67	10月19日	名取市洞家住宅	第12回復興カフェ	40			研究開発事業
68	10月25日	エルパーク仙台(仙台市)	キャリア教育講演会「20歳からの自分磨き」				⑥こころざし・キャリア教育事業
69	10/31～11/2	陸前高田市等	お茶の水女子大学との連携事業(JICA)				研究開発事業
70	11月1日	宮城県立石巻支援学校	学校祭の準備・運営補助, 児童生徒への活動補助	14	14		②教員補助事業
71	11月5日	宮城教育大学	ipad講習会	10			人材育成
72	11月5日	ホテル白萩(仙台)	みやぎ教育の日推進大会「みやぎからの発信～未来につなぐ教育の創造～」				⑥こころざし・キャリア教育事業
73	11月7日	仙台市勾当台公園	仙台市PTAフェスティバルへの参加・ワークショップ開催	3			④こども対象・参加イベント事業
74	11月13日	宮城教育大学	第13回復興カフェ	23			研究開発事業
75	11月22日	東六郷小学校	東六郷小学校学校祭での演奏披露	6			④こども対象・参加イベント事業
76	11月23日	亘理町公民館	サイエンスフェスティバルin亘理町2014への協力	3			④こども対象・参加イベント事業
77	11月26日	東松島市コミュニティセンター	東松島市協働教育研修会 「今見直される協働教育の底力～東日本大震災が教えてくれたこと～」				⑥こころざし・キャリア教育事業
78	11月29日	石ノ森漫画館	本学技術教育講座主催のクリスマス工作イベントへの協力	5			④こども対象・参加イベント事業
79	11月30日	石巻・女川地区	第19回被災地視察研修	30			人材育成
80	12月16日	岩出山スコーレハウス	大崎市協働教育研修会「協働教育におけるコーディネーターの役割」				⑥こころざし・キャリア教育事業
81	12月19日	宮城教育大学	第14回復興カフェ	30			研究開発事業
82	12/23～12/26	蔵王町ございんホール	自学習支援(主に中学生対象)	1	3		①教育復興支援塾事業
83	12/24～12/26	大和町立宮床中学校	自学自習支援(中1～3年生対象, 主に数・英)	3	6		①教育復興支援塾事業
84	12/24～12/26	栗原市文化会館・教育研究センター	小学3～6年生を対象とした「学府くりはら塾」での講師(算数, 冬休みの課題・指導を含む)	10	16		①教育復興支援塾事業
85	12/25	柴田町立船岡中学校	自学自習支援(中1～3年生対象)	2	2		①教育復興支援塾事業
86	12/25～12/26	気仙沼市内小・中学校	自学自習支援(小3～6年及び中1～3年生対象)	10	(3)	20 (6)	早稲田大学 ①教育復興支援塾事業
87	12/25～12/26	大郷町立大郷小学校	自学自習支援(小4～6年生対象, 算・国)	8	11		①教育復興支援塾事業
88	12/25～12/26	大崎市立古川東中学校・古川南中学校	自学自習支援(小・中学生対象)	4	7		①教育復興支援塾事業
89	12/25～12/27	栗原市教育研究センター	中学生を対象とした「学府くりはら塾」での講師(3教科, 教材作成・指導を含む)	8	19		①教育復興支援塾事業
90	1月21日	宮城教育大学	第2回学生協力員総会	60			人材育成
91	1月22日	宮城教育大学	第15回復興カフェ	30			研究開発事業
92	2月4日	宮城教育大学	第16回復興カフェ	30			研究開発事業
93	3月7日	名取市開上中学校	卒業式での音楽演奏ボランティア	6			④こども対象・参加イベント事業
94	3月9日	宮城教育大学	第17回復興カフェ	7			研究開発事業
95	3月21日	仙台市立荒浜小学校	卒業式運営補助ボランティア	5			④こども対象・参加イベント事業
96	3月21日	仙台市立東六郷小学校	卒業式での音楽指導ボランティア	2			④こども対象・参加イベント事業
97	3/16～20	南三陸町立志津川中学校	教員補助	16	(11)	80 (55)	愛知教育大学 奈良教育大学 ②教員補助事業

## 2 教育復興支援センターだより

教育復興支援センターだより

### ④ 第3回国連防災世界会議 1年前シンポジウムに参加して (3月1日・土)

平成27年3月に開催予定の第3回国連防災世界会議が仙台市で開催されるにあたり、会議開催まであと1年となったこの時期に、世界へ、そして未来へ何を伝えていくべきなのかを考えるためのシンポジウムが開催された。内閣府大臣官房審議官(防災担当)佐々木克樹氏の「国際防災と日本の役割について」の基調講演と、「第3回国連防災世界会議」仙台開催と「防災・減災」、「復興」の未来と題したパネルディスカッションがあった。また、シンポジウムに先立ち「3.11シンサイカルタ」を使ったワークショップや展示コーナーがあった。



### ⑤ 第10回復興カフェ in Miyako (3月17日・月)

金沢大学環境保全センター長・鈴木克徳教授を講師にお迎えし、第10回復興カフェを開催した。「地域活性化を対象とした人材育成における大学と地域の連携」と題し、金沢大学の里山教育研究活動と地域貢献、角間の里山自然学校、「能登里山マスター」養成プログラムなどお話し頂いた。



### ⑥ 気仙沼市復興座談会 (3月18日・火)

本センター研究プロジェクトの一環で、気仙沼市連携センターにて気仙沼市復興座談会が開催された。講師に、気仙沼市商工会議所会頭・菅原昭彦氏、磯谷水産代表取締役・安藤竜包氏、冷凍水産加工業共同組合長・菊田初男氏をお迎えし、気仙沼市の復興について同市における産業の核である水産業を軸に水産業の流通、冷蔵、加工、小売の連関について問題点を整理した。



### ① 国際教育シンポジウム2013 (2月1日・土)

国際教育から見える地域コミュニティ～震災後の東北から考える持続可能な社会へと題した標記シンポジウムが、仙台市青葉体育館で開催された。本学の根本アリンソン特任准教授による基調講演「イギリスから福島へ、本当のふるさとは何？」があり、その後、分科会1では、仙台市内小学校の復興授業、アメリカ・カナダからのALTによる海外の防災事情のグループワーク、分科会2では、青年海外協力隊の復興支援の現状や課題などを議論した。



### ② 環境・防災教育セミナー (2月7日・金)

本センター・研究プロジェクト「教員養成教育における環境防災教育」の一環として標記セミナー【特に被災地における大学教育の環境・防災教育カリキュラムの動向】が開催された。齋藤千映美教授による本学の「環境・防災教育」の講義概要、センター特任教授や満田准教授による講義内容の発表、岩手大学比叡教授より、岩手大学の取組み発表があり、立教大学阿部治教授より各大学の取組みに対するコメントがあった。その後、情報交換が行われた。



### ③ 特別支援教育フォーラム (3月1日・土)

震災から3年—これからの子どもたちの元気を支援するために

標記フォーラムの基調講演(女川町・村上善司教育長)では、震災から3年を経過した今、女川町の子どもたちの現状を説いたうえで、被災地の子どもたちの心の支援が求められていることなどを力説した。パネルディスカッションでは、福岡英世京都教育大学教授、藤森和美武蔵野大学教授、今野和則石巻支援学校校長らが、一人一人目を向けて教育することの大事さについて話し合われ、参加者たちは震災から3年の節目に、これからの変わり行く支援のあり方について熱心に耳を傾けて聞いていた。



教育復興支援センターだより

19号  
14.6.11

教育復興支援センターだより

### ⑩ グリーンウェイブ活動2014に参加 (5月22日・木)

国連が定める国際生物多様性の日(5月22日)に、世界各地の子どもたちが学校や地域などで植樹等を行う「グリーンウェイブ」活動2014が、昨年に続き参加し、今年はブルーベリー2本(同系統内の2品種)を植樹した。今年も昨年植樹した四季咲きのバラ同様、環境教育実践研究センターの協力を得て実践した。



昨年植樹した四季咲きのバラ(数種のツボミあり)

### ⑪ 宮城県立石巻支援学校の運動会を支援 (5月24日・土)

石巻支援学校・運動会の教員補助ボランティア学生を派遣した。今年は学生の他にも、本学教員1名がボランティアとして参加し、東北福祉大学のボランティア学生とともに、競技補助、児童生徒の介助、テントの撤去など大活躍した。



### ⑫ JENESYS2.0 フィリピン防災コースの学生来訪 (5月30日・金)

JENESYS2.0の一環として、「防災」をテーマにフィリピンの大学生等37名が来訪した。一行は、防災のモデル都市に選ばれた宮城県仙台市を訪問後、本センターを訪れた。センター職員より、教育の復興状況や聞き、本学の学生との文化交流(お習字・折り紙など)の楽しいひとときを過ごした。また、昨年フィリピンを襲った台風30号被害への募金(15,907円)を、フィリピンにてボランティア活動を実践している学生へ託した。



教育復興支援センターだより

### ⑦ ボランティア協力員総会 (4月23日・水)

平成26年度第1回ボランティア協力員総会が210番教室にて開催された。中井センター長の挨拶、職員紹介に続き、協力員の活動概要などの説明があり、新1年生55人を含む150人(3年32人、2年63名)体制でスタートすることになった。今後、学管支援ボランティア活動への参加呼びかけの他、運営メンバーを中心に新入生対象の被災地視察研修・復興カフェ in Miyako・大祭祭などを企画・運営していく。



### ⑧ IDEAタイ校長研修 (4月24日・木～4月25日・金)

本学と連携協定を結んでいるタイのIDEAから、校長研修のため、園長 Mr.Anusak Ayuwathana (タイ教育省南部圏域地域教育開発部長)他31名が本学を訪れ、日本の学校教育について講話を受けた。教育復興支援センターでは「本センターの概要と活動」を説明し、翌日の女川・石巻の被災地視察訪問を担当した。女川町立女川中学校では、授業見学や校長先生のお話しもあり、参加者たちは興味深げに聞き入っていた。



### ⑨ ボランティア協力員第1回定例会 (5月8日・木)

ボランティア協力員第1回定例会がセンターミーティングルームにて開催された。2年生の協力員を中心に23名の運営委員が、今年度の目標、運営メンバーの体制、役割・役割などを話し合い、今後やってみたいことなどを検討した。



教育復興支援センターより

④ 被災地視察研修 4回開催 (6月14日・土～6月29日・日)

6月の土日に、通算15～18回目の被災地視察研修を実施した。今回は全コース学生企画で、気仙沼コース、半日コース・2回、南相馬コースで、参加人数は4日間で109名であった。刻々と変わる被災地には慰霊碑などが建立されているが、6月15日(日)には、名取市日和山近くにてお地蔵さんの建立式典が営まれていた。



岩沼市千年希望の丘にて集合写真

震災遺構候補の宮城県気仙沼向洋高校

お地蔵さんプロジェクトによる建立式

カナダ政府からの寄付により建設されたメープル館にて登壇

南相馬市小高区役所前にて出身の学生から説明を受ける

偶然地元の方のお話を聞くことができた

① 仙台市立荒浜小学校運動会支援 (6月31日・土)

30度を超える熱い中、19名のボランティア学生は、先生方の指導の下、朝8時から東宮城野小学校(仮校舎)の校庭で行われた運動会の事前準備、競技の補助、後片付けなどの支援活動を行った。初めて参加する学生に対して、先輩(4年生)からの助言もあり、学生同士の学び合いも見られた。



② 仙台市立中野小学校運動会支援 (6月7日・土) E5016 幼児教育コース 藤原 龍帆

あいにくの雨により決行が危ぶまれたものの、状況によって体育館や校庭へ移動しながら無事運動会が開催された。体育館で競技を行うと決まった時には、少し残念そうなお様子の子どもたちでしたが、競技が始まると一変、全力で一つ一つの種目に取り組み、そして全力で楽しんでいく。運動会全体を通して、今まで見たことのない彼らの姿、表情を見ることができ、本当に嬉しかった。私自身、週に一度ボランティアとして活動させてもらっているが、これからは活動を続ける中で、子どもたちのため、中野小学校のために、自分自身出来ることを一生懸命頑張っていくと改めて強く感じました。



③ 第11回復興カフェ in Miyako 開催 (6月11日・水)

第11回は、日系アメリカ人ジャーナリストで映画制作者の、ダイアン・フカミ氏に「日系アメリカ人ジャーナリストからみた東日本大震災」をテーマに、記録ドキュメンタリー映画「Stories from Tohoku」の製作に至った経緯や想いをお話いただいた。その後、映画上映を行ったが、フカミ氏から「何かを受け入れながら前に進んでいく」東北の姿を伝えられたこととメッセージがあった。



教育復興支援センターだより  
20号  
14.8.7

教育復興支援センターより

⑤ 平成26年度 夏期期間中のボランティア一覧 (8月4日付け)

1年連続！ボランティアの夏！通信、被災地の教育復興支援ボランティアです！

No.	所属先(団体名)	人数	活動期間	活動内容	備考
1	宮城県立第一高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
2	宮城県立第二高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
3	宮城県立第三高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
4	宮城県立第四高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
5	宮城県立第五高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
6	宮城県立第六高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
7	宮城県立第七高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
8	宮城県立第八高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
9	宮城県立第九高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
10	宮城県立第十高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
11	宮城県立第十一高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
12	宮城県立第十二高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
13	宮城県立第十三高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
14	宮城県立第十四高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
15	宮城県立第十五高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
16	宮城県立第十六高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
17	宮城県立第十七高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
18	宮城県立第十八高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
19	宮城県立第十九高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
20	宮城県立第二十高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
21	宮城県立第二十一高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
22	宮城県立第二十二高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
23	宮城県立第二十三高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
24	宮城県立第二十四高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
25	宮城県立第二十五高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
26	宮城県立第二十六高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
27	宮城県立第二十七高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
28	宮城県立第二十八高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
29	宮城県立第二十九高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア
30	宮城県立第三十高等学校	1	8/10	ボランティア活動	ボランティア

8月-9月のボランティアを募集しています！

教育復興支援センターより

⑤ JENESYS2.0 (タイコース) 来訪 (6月23日・月)

5月末のフィリピンコースに続き、JENESYS2.0の「防災」をテーマにタイの大学生等39名が来訪した。センター職員より、本学の説明や教育の復興状況について、タイの学生による演奏、ムエタイ、教職員も交じった踊りの披露があった。その後、本学の学生との交流のひとときを過ごした。



⑥ 不安解消会 (7月16日・水)

夏休みの学習支援ボランティア活動を実施するにあたり、参加学生の不安(特に一年生)を取り除くことを目的に、ボランティア協力員(1年生、2年生)が不安解消会を開催した。中井センター長の開会の挨拶後、ボランティア経験者の話、Q&Aなどが紹介された。この不安解消会は、夏期休暇中の学習支援ボランティアの社生も兼ねている。



⑦ オープンキャンパス (8月1日・金)

本学のオープンキャンパスで、教育復興支援センターにも大勢の見学者が訪れ、ボランティア協力員たちが対応した。学生が集まるミーティングルームで、ボランティア活動の話に耳を傾ける高校生も大勢いた。



教育復興支援センターより

④ 日本安全教育学会 第15回宮城大会(9月13日・土～14日・日)

東北工業大学にて開催された標記学会「東北から発信する学校防災教育と学校安全～実践上の課題を乗り越えるために」に小田特任准教授が、実行委員として関わった。また、「教員養成大学におけるサービスマーケティングとしての防災・復興教育」の学術発表を行った。



⑤ 再(また)アエルで学ぼう宮城大防災3days(9月19日・金～21日・日)

AER(アエル)アトリウム2階にて標記公開集中講座を開催した。この企画は本学が文部科学省より委託された社会教育としての、「学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業」の一環で昨年に行われた。本学の教員による講座に交差して、学生による【学芸支援ボランティア活動の報告】と【被災地視察訪問の報告】もあった。初日(19日)は教育復興支援センター事務局や、気仙沼事務所に、本センターのテレビ会議システムを活用して同時中継を行った。



⑥ 日本国際協働センター「北米地域との青少年交流」事業一行来訪(10月16日・木)

JICEの「KAKEHASHI Project-The Bridge for Tomorrow」から引率者を含めた21名の米国青少年が本学の学生たちと交流した。大学紹介、日本文化紹介、秋明会館での昼食後、仙台市近郊の東日本大震災被災地視察を行った。被災地視察では、教育復興支援センター・ボランティア協力員「被災地視察担当」の学生が英語案内役を務め、同世代の学生との相互理解と交流の促進を図った。



教育復興支援センターより

⑩ iPad講習会(11月5日・水)

来年3月開催の国連防災世界会議に向けて、教育復興支援センターの活動を紹介する動画作成のための【iPad講習会】を開催した。参加者たちは、本センター貸出用のiPadを活用して、写真撮影を行い、プレゼン用に加工した。今後、3月の会議に向けて講習会を数回開催し、完成した動画を、ぜひだいいメディアテークやフォーラム会場にて上映予定である。  
※本センターでは、学生に対して学習支援ボランティア活動用に「iPad」の貸出を行っている。



⑪ 第13回復興カフェ in Miyakyo(11月13日・木)

附属図書館展示ホールにて、第13回復興カフェ in Miyakyo を開催した。今回は、8月に起こった「大規模な広島土砂災害」の現地調査の様子を、当センター副理事長と副センター長に報告頂いた。(発表資料は、「センター・2F地下に場所」今後の復興カフェは、「福島いわき市」と、JICA教員研修で訪れた【岩手県陸前高田市】の震災復興状況について、報告する予定である。(12月と1月)



東北大学災害科学国際研究所(26年11月竣工)から見た宮城教育大学



教育復興支援センターより

⑦ 第12回出張復興カフェ in Miyakyo(10月19日・日)

本学では文部科学省と共催で、来年3月開催の国連防災世界会議において、「学生による被災地視察研修」を実施する予定である。今回の「出張復興カフェ in Miyakyo」では、被災地視察研修の候補地である、国重要指定文化財「洞人家住宅」において、仙台いけね研究会の協力をいただき、教職員や学生たちの事前視察研修を実施した。



⑧ 大学祭・教育復興支援センター企画「復興と教育」(10月25日・土～26日・日)

今年の大学祭では、映画「Stories From Tohoku」「日系アメリカ人と震災」を上映(ダイアン・フカミ監督からメッセージビデオもあり)、国際理解教育研究センター・研究協力員の金子奈奈さんから「日系アメリカ人から見た震災」をお話し頂いた。翌日は学校現場の先生(南三陸町立津川中学校・菊田浩文先生、仙台市立長町小学校・武田秀典先生)お二人に基調講演をいただき、「子どもに震災を伝える」というテーマで意見交換会を行った。



⑨ JICA教員研修(10月31日・金～11月2日・日)

JICA教員研修生(7カ国12名)が昨年に引き続き陸前高田市を視察し、米崎小学校仮設住宅・自治会長・佐藤一男氏から講話をいただいた。2日には、横田川の駅で祭りに参加、戸羽市長に面談した。また、長い巻き寿司づくりに挑戦し祭りを楽しんだ。米崎小学校仮設住宅では、地域住民たちと、さんまの炭火焼きを食し、研修生たちのお国自慢の料理を振る舞って、世界地図や地球儀を回しながら話した。



教育復興支援センターより



21号  
'14.11.18

① タイ・チュラロンコン大学一行が本センターを視察(8月5日・火)

タイ・Chulalongkorn UniversityからAthaapol Anunthavorasak准教授とスタッフ3名が来訪した。Athaapol教授は、9年前、本学の教員研修留学生として環境教育実践研究センターに、1年間在籍した。東日本大震災後の教育の復興状況やタイの洪水など防災・復興の情報交換を行った。また、来年3月に仙台にて開催の第3回国連防災世界会議に向けて、タイ王国やユネスコなどの貴重な情報を得た。



② 第3回国連防災世界会議半年前フォーラム(8月31日・日)

仙台市が主催となり、「復興・防災の活動とまちづくり～伝える防災 感じる防災～」と題した半年前フォーラムが開催され、本学から職員1名とボランティア活動に積極的に関わってきた学生2名が参加した。地域で活動する若者たちがテーブルを囲んでの討論、参加者を変えてのワークショップが行われ、日々の暮らしのなかで防災を意識し、蓄積された知恵を伝える、ボランティア活動を楽しむに変え、繋がりを忘れないなどが話し合われた。



仙台市国連防災世界会議準備室担当課長の挨拶

仙台市市民活動サポートセンター

③ 災害後・紛争後の教育分野での国際緊急人道支援 ネットワーク調査(8月23日～)

INEE(緊急時の教育のための機関ネットワーク)ニューヨークオフィスなどを小田特任准教授が訪ね、関係者への聞き取り調査を行った。INEEは緊急時の教育のための国際基準(教育ミニマムスタンダード:準備・対応・復興)などを刊行し、全世界でネットワークを構築、研修や学術誌の刊行等を行っている。これまでは紛争後の緊急人道支援を扱ったものが主だったが、今後は災害後の教育にも注力することになった。今後、東日本大震災での経験と教訓を、こうしたネットワークのコンテンツにフィードすることが重要だと考える。



教育復興支援センターだより

④ 第15回復興カフェ in Miyako (1月22日・木)

JICA教員研修の一環で、陸前高田市視察研修を実施したので、随行した藤原忠和主任と、陸前高田の被災地調査を実施した、瀬尾副センター長から復興状況について報告頂いた。瀬尾副センター長から、ベルトコンベアによる土地の嵩上げが各地で行われていることを中心とした復興状況の報告と、藤原主任からは、杜鰯の養殖で生計を立てる人たちが、震災後、一度消えたマーケットを再び復活させることがいかに難しいかということや、陸前高田市立米崎小学校の仮設住宅にて国際交流が実施されたことの紹介があった。



⑤ 国連防災世界会議イベント (1月28日・水)

第3回国連防災世界会議にて、本学は総合フォーラムの一つとして、文部科学省・日本ユネスコ国内委員会と共催し、ESDと人づくり、防災教育をテーマにシンポジウムを開催するにあたり、イベント・【東北発！防災教育の新たな展開を考えるワークショップ】～ホストDESDとホストHFAを考える～を開催した。

- ①防災教育日本連絡会事務局長 (東北大学災害科学国際研究所) ・桜井愛子准教授 「HFA2と防災教育に関する“仙台宣言” 発出にむけて」

- ②本センター・小田隆史特任准教授 「「東大・ESD推進の軌跡、震災後の歩み～国連防災世界会議総合フォーラムに向けて」

- ③本学学校教育課・田端健人教授 「ESDと震災復興を通じた教育系大学の連携を目指して」

の発表後に、参加者による「国連防災世界会議へ向けた教育現場からの期待」と題したワークショップを行った。参加者には現職の教員も多く、短時間ではあったが実りあるワークショップとなった。今回も本センター所有のTV会議システムを活用して、気仙沼市連携センターやセンター内事務室へ映像を配信した。



TV会議システム

本センター所有のTV会議システムについて

RIOOH Unified Communication System Apos のアカウントを5つ契約しました。TV会議をご検討の方は、教育復興支援センターまでご連絡ください。(附属学校園とも接続可能です。)

教育復興支援センターだより 22号 '15.3.6

① 被災地視察研修 石巻・女川 (11月30日・日)

学生主催による被災地視察研修(石巻・女川方面)を実施した。学生・教職員合わせて22名が参加、石巻の門脇小学校、女川小学校、女川の万葉島会館、地域医療センターを訪れ、当時の被災状況および現在の復興状況を視察した。



② 第14回復興カフェ in Miyako (12月19日・金)

復興教育学創設室の「仮設テントの炊き出し研修」と合わせ、【拡大・復興カフェ in Miyako】を開催した。昼休みに中庭にて、災害時のホットサンドづくりを体験した後、附属図書館展示ホールにて福島県いわき市の復興状況等について、当センター副センター長と小田特任准教授が報告した。今回の復興カフェは、11月のJICA教員研修で訪れた【岩手県陸前高田市】の震災復興状況について報告する。



③ 第2回ボランティア協力員総会 (1月21日・水)

平成26年度第2回ボランティア協力員総会が210番教室にて開催された。中井センター長の挨拶の後、各地域におけるボランティア活動について、代表の学生から活動報告、感想等、発表がなされた。新ボランティア協力員代表(新2年生・佐々木奏太さん)から来年度に向けての抱負が述べられた。



教育復興支援センターだより

⑥ 第16回復興カフェ in Miyako (2月4日・水)

仙台市立中野小学校や仙台市立飛浜小学校にて、ボランティア活動を継続して実践してきた学生に、本学の後輩たちに望むボランティア活動などについて報告していただいた。平成27年度をもって閉校する中野小学校ボランティア学生からは、継続することで見えてくるものがあり、閉校を意図活動が求められていて、最後の1年間をどのように活動するかなどの話があった。飛浜小学校ボランティア学生からは、飛浜小学校の教員へのアンケートに基づき、ボランティア学生にやって欲しいこと(子どもたちをきちんとしかけて欲しい)、やって欲しくないこと(子どもたちに名前ではなく〇〇先生と呼ばれて欲しい)などの話があった。



⑦ 第3回国連防災世界会議のご案内 (2015年3月14日・土～18日・水)

文部科学省及び日本ユネスコ国内委員会とともに、総合フォーラム「持続可能な開発のための教育を通じた防災・減災の展開～より良い子どもたちの未来に向けて～」を3月16日(月)東北大学蔵ホールにて開催します。持続可能な開発のための教育の10年 Decade of Education for Sustainable Development (DESD) 及び兵庫行動枠組み (HFA) が最終年を迎える今、これまでの取組を振り返り、持続可能な開発のための教育の防災教育への貢献について被災地での実践事例とともに議論します。また、会議の期間中に本学として様々な取り組みを実施します。



## 発刊にあたって

東日本大震災から4年を経過し、この「あすへ向けての軌跡」も4冊目となりました。改めて、震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々へお見舞い申し上げます。

本センターは、震災によって甚大な被害を受けた宮城県内の学校教育の復旧・復興——児童生徒の確かな学力の定着・向上、現職教員の各種支援等を期して、平成23年6月に設置されました。目標達成に向けて支援実践部門と研究開発部門とが連携協力して、地域への貢献、新たな教育の創造、復興グローバル人材の育成に努めています。

本年度、支援実践部門においては、学習支援を中心とする被災地からのボランティア学生の派遣要請に県内外の他大学からの支援もあり、ほぼ応えることができました。また、3年目を迎えたボランティア協力員を中心とする学生組織が本格的に機能し、各ボランティア活動の充実が図られるとともに、後述する国連防災世界会議・仙台大会の一端を担う取組などが新聞、テレビ等で紹介され、学内外から高い評価を得た一年でした。

研究開発部門においては、被災した自治体、教育委員会の協力を得て、地域社会や学校を取り巻く現在の課題や復興の状況の把握に取り組んでいます。特に、転居や仮設暮らしを余儀なくされている被災者の空間移動と地域の関係や、街づくりの課題などをモニタリングするなど、被災地のニーズの把握、教訓・経験の収集・蓄積、そこから得られた知見の発信に努めています。また、学びを通じた被災地の地域コミュニティ再生支援事業、被災地における命の教育、生き方教育に貢献する「p4c (philosophy for children: 子どもの哲学) せんだい推進プロジェクト」にも取り組み、研究、実践を重ねています。

さて、27年3月、「震災の経験と教訓を仙台・東北から世界へ」をテーマに仙台市で世界の防災戦略を議論する会議が開催され、本学としてもそのいくつかに参加することになりました。

その一つは、文部科学省、日本ユネスコ国内委員会と共同で主催した『東日本大震災・総合フォーラム』です。「持続可能な開発のための教育を通じた防災・減災の展開——より良い子どもたちの未来に向けて」をテーマとしてパネルディスカッションが行われました。席上、本学学長がフォーラム開催の趣旨説明を行いました。パネリストの方々からどのような「防災・減災に向けた提言」が世界中に発信されるか興味深いところです。なお、本フォーラムには本学の学生有志が運営補助にあたったほか、多数の学生が参加しました。最先端の情報や知見に身近に接し、視野を広め、思考を深めてくれたことと期待します。

次に、復興大学が主催する『シンポジウム』においては、本学のボランティア協力員の学生代表が、震災以降現在に至るまでの本学、センター、学生ボランティアの多様な活動を報告するとともに、成果と課題を発表しました。

さらに、『エクスカージョン』では、やはりボランティア協力員の学生が海外の希望される方々を被災地である仙台市荒浜・名取市閑上方面へ案内しました。見学先の洞口家住宅、閑上中の旧校舎、日和山等、現地調査を繰り返し、休憩先やトイレの場所と現状の把握など、きめ細かな「おもてなし」を心がけていました。また、英文のパンフレットづくりや、英語によるスピーチの訓練に励んでいる姿も印象的でした。

その他、いくつかの会場に本学、センター、ボランティア協力員の活動を展示するブースが設けられ、7か国語からなる小冊子「3.11を忘れない (Reminder of 3.11)」を配布、説明したほか、多数の学生ボランティアが、仙台駅等で案内・誘導にあたりました。このように本学学生の活躍の場は多く、それぞれの任務を着実に遂行することで、ごく自然に「人材の育成」が図られつつあることは喜ばしいかぎりです。

本「軌跡」は教育復興支援センターの歩みをまとめたものです。別に刊行する研究「紀要」とともにご参照願えれば幸いです。

震災からの一刻も早い復興を祈念し、発刊にあたってのごあいさつといたします。

教育復興支援センター長  
中井 滋

東日本大震災

踏み出そう! 子どもたちの笑顔のために

# あすへ向けての軌跡

震災から4年を経て

---

---

平成27年3月31日発行

編集・発行 / 国立大学法人  
宮城教育大学 教育復興支援センター

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149

電話 022-214-3296 022-214-3667

E-mail fukkou@adm.miyakyo-u.ac.jp

制作・印刷 / 株式会社ホクトコーポレーション

---

---



ご支援いただきました皆様  
協働いただきました皆様  
ありがとうございました

地域とともに 子どもたちの笑顔のために  
これからは 本当の復興です

東日本大震災

踏み出そう! 子どもたちの笑顔のために

あすへ向けての軌跡 ～震災から4年を経て～

発行



国立大学法人  
宮城教育大学

**教育復興支援センター**

〒980-0845 仙台市青葉区荒巻字青葉149

TEL 022-214-3296

E-Mail : fukkou@adm.miyakyo-u.ac.jp



このパンフレットは「水なし印刷」  
により印刷しております。



環境にやさしい植物油インキ  
「VEGETABLE OIL INK」で  
印刷しております。